IS〜インフィニットストラトス〜　Sword & Sword

黒猫　訃桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ～インフィニットストラトス～　Ｓｗｏｒｄ　&
Ｓｗｏｒｄ

【Ｎコード】
Ｎ１３０１Ｘ

【作者名】
黒猫　訃桜

【あらすじ】
ＩＳ：正式名称『インフィニット・ストラトス』。宇宙空間の活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ。
その操縦者を育成する特殊機関ＩＳ学園に強制入学させられた織斑一夏。
世界中が初めてＩＳを動かした男に非常に関心を持った。そして、第２第３の『織斑一夏』を生み出そうと、日本政府は新しい機関を設ける。その名は、ＩＳ搭乗資格研究機関、そして、織斑一夏が入

学した直後この機関がＩＳ学園に１名の研究参加者（テスター）を送り込む。その名は鬼頭蒼真。そして２人はＩＳ学園で出会いこの物語は始まる。

プロローグ

「やべぇ…緊張してきたな…むしろ緊張するなったいう方がおかしいんだ……」

そう、誰だって入学初日は緊張するものだ。ましてや、今から向かう学校は俺ともう一人を除いて全員女の子なのだ。

サクっと自己紹介をしておこう。俺の名前は鬼頭蒼真（きとうそうま）。今年ＩＳ学園に入る事になったＩＳ搭乗資格研究機関に所属する中学生…いや、今はもう高校生だ。

ＩＳ搭乗資格研究機関とは織斑一夏（男）がＩＳに乗った事をきっかけに、ほかの男でもＩＳに乗れるようにして、自国防衛力を高める事を目的とした日本政府が作った機関である。決して、女尊男卑の世の中をどうにかしようと設立されたものではない……きっと

「しっかし…遠かったなぁ……次に実家に帰るのは夏休みか、家燃えてないかな……」

蒼真の両親は共働きな上に両親とも海外に単身赴任状態、中学時代から一人暮らしなのでＩＳ学園が全寮制と聞いても、あっそう、位にしか思っていなかった。

しかし、俺がなぜこんな状況になったかというと、はっきり言えば、高校受験に失敗したと言う事が一番だろう。本命も滑り止めも全部滑った。

滑った後に3回転半程回って着地した所がこのＩＳ学園だった。俺の所属している機関に受験に全部落ちちゃったんです！どっか高校ないですかぁぁ！？と涙声になりながら迫った所、「わかった…わかった！何とかしてやるから鼻水を服につけるのをやめろ！」と言ってこのＩＳ学園にかなり強引に入る事が出来た。
俺にとってＩＳ学園に入る事は東大に合格するよりも嬉しい事だ。
俺はある日よりＩＳに人1倍憧れている。そう、自分を救ってくれた真っ白なＩＳを見たときから……

ドン！！

「きゃぁ！」

「ぐふぅ！？」

思い出に浸りながら歩いていたら、曲がり角を曲がった所で女性にタックルされた。ちなみに俺は相手の手が鳩尾に入りその場から動けない。

「ちょっと！あなた！どこを見て歩いてらっしゃるの！？全く！わたくしは急いでいるのですよ！本来なら謝罪を要求する所ですが、今は急いでいるのでこれで許して差し上げますわ！」

「ちょ…おま……」

倒れて動けない俺を一瞥して、そのまま走り去る女性、分かったの

は長い金髪、という事だけだった。

「おー…いてぇ……って俺ものんびりしてる場合じゃねぇ！このままじゃ遅刻しちまう！！……ん？」

足元に手帳のようなものが落ちている。さっきの無礼な突撃女が残していったものかもしれない、

「よし、後でとっちめてやる……」

そして、その手帳のようなものをポケットにしまい、俺はＩＳ学園に向かい全力疾走を開始した。

～ＩＳ学園１－１教室～

「はーい、みなさん！こんにちは！これから一年間みんなの福担任になるやまｄ……」

ガラララ！…ダン！！

「ひぃ！！な…な…なんですか……！？」

教室のドアが勢い良く開かれ凄い音を立てたので副担任の山田まや先生はビクビクしながらこちらを見ていた。

「ハァ…ハァ…ゼェ…ゼェ……スー……ハー……遅れてすみません。鬼頭…蒼真…です」

学園から全力疾走をして、全力疾走のまま教室に飛び込んだ結果である。

「出席を呼ばれてないのならまだギリギリセー……」

スパァン！！

脳天直撃セガサターン！！……え？古い？ごめんなさい……

「お…おおぉぉぉぅぅ……！！」

何か、何か得体の知れない物で俺の脳みそはシェイクされた。その俺の脳みそをシェイクした物を確かめようと振り返ると……黒いスーツをすらっと着こなした美女が立っていた。

「何が出席を呼ばれていないからセーフだ、この馬鹿者！よし、貴様に遅刻をした褒美をやろう、今ここで自分の自己紹介をしろ」

「え……？」

そこで俺は固まった。回りを見る。女性、女性、女性…見渡す限りの女性、だがその半分以上は笑っているか、笑いを堪えるので精一杯だ。こんな中で自己紹介をしろと言うのか？この人は……鬼だ…悪魔だ…酷すぎる……第一印象って言うのはその人の印象の７０％を占めるというのに…何と言う理不尽……！

「おい、余計な事を考えてないでさっさと自己紹介しろ、遅刻者」

「はい……えと、鬼頭蒼真です。ＩＳ搭乗資格研究機関からテスターとして入学しました。好きな事は体を動かす事全般です。夢はＩＳに乗る事、理想はこの学校に居る織斑一夏です。」

「はいはい、しつもーん！彼女とかいるんですか～？」

「年中無休で募集中です！」

ウケを狙って見たが、まぁ割かし好印象だったと思える。自己紹介を済ませると、次の人の自己紹介になった。

「織斑一夏です。よろしくお願いします。」

「…！お前が…織斑一夏…？」

「…？俺の事知ってるの？」

「あぁ…もちろんさ、お前は俺の理想だ」

「理想…？さっきも言ってたな、良くわかんないけど、ひょっとしてＩＳに乗れるから…？」

「その通りだ、まぁ同じクラスメイトになったんだ、ひとつ仲良くしてくれよ、一夏」

そう言って、自分の理想へ握手を求めると、その理想はしっかりと手を握り返してくれた。

「あぁ、俺の方こそよろしくな蒼真、男が一人だけって言うのは、思った以上厳しそうだ…」

最後の方は周りには聞こえない程度の小声だった。こうして、俺と織斑一夏は出会ったのだった。

第1話：極東の国と極西の国

そして、ＩＳ学園で初めての授業が始まった。

「織斑くん？鬼頭くん？ここまでで分からない事は何かありますか？」

「ほとんど全部分かりません。」

「右に同じ！」

「え…ぜ…全部ですか？」

山田先生の顔が引きつっている。初心者向けの説明だったのかも知れないが、あいにく普通の中学に通っている上に、ＩＳ関係の授業はさっぱりだった。

「織斑くん達以外で、現段階で分からないって言う人はどれ位居ますか？挙手をお願いします……」

シーーーーン……

周りを見渡しても誰一人手を挙げている人は居ない、え…なに？つまり俺たちだけが全く理解出来てない…？

「織斑、鬼頭、入学前の参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

「急な入学だった為、参考書自体貰っていません」

「必読と書いてあっただろう！馬鹿者！」

ズパァン！！

一夏と俺は、一緒に脳天に一撃を貰う結果になった、一夏の話だとこの一撃で約５０００もの脳細胞が死ぬらしい……ちなみに俺は今回関係ない……

「再発行してやる、２人とも一週間で覚えろ、分かったな」

「え…あの厚さを一週間はちょっと……」

「え…１週間じゃあ、あの半分も……」

「やれと言っている」

「「わかりました……」」

俺と一夏の声は見事にハモったのであった。

〜1ー1休み時間〜

「一夏、あの厚さ1週間でどうやる…？バックレは無理かな…？」

「蒼真……それは非常にお勧めしない、あの鬼軍曹こと織斑千冬は俺の姉だ、その性格上、バックレなんてみろ……あの程度じゃすまn……」

「ちょっと、よろしくて？」

……俺達は固まった。まず、この人誰？さっきの休み時間は女子軍団からもみくちゃ状態にされて、女子校のイメージが粉砕されたばかりだと言うのに、まだ俺のライフを削るのか！？もうやめて！俺のライフはもう0よ！一夏も同じ様で、うんざりしたような感じだった。

「訊いてます？お返事は？」

「あぁ、聞いてるよ…用事は何？」

少しイライラしながら返事をすると、すごい勢いでまくし立ててきた

「まぁ！なんですね、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるのではないかしら？」

「……」

やっべぇ……こいつマジウゼェ……って今朝もこんな感じの声を聞いたような……？

「悪いな、俺、君が誰か知らないし」

「私を知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試首席のこのわたくしを？」

やっぱりどっかでこの声聞いたことあるな……声帯を検索、照合……1件の検索結果が出ました。

「おい、お前」

「お…おいですって！？このわたくしに向かって！？全くあなたは今の話を何も聞いていなかったんですの？この！入試首席の超エリートのセシリア・オルコットに向かっておい、ですって？」

この！の部分をえらく強調してきたがそんな事は今はどうでもいい、問題は別にある。

「じゃあセシリアさん？今朝あなたは曲がり角でとある男性にぶつかりましたね？私が知っている限りでは、歩いている男性にあなたがぶつかって行った様に見えたのですが？」

「な…なんの事でしょう…？このセシリア・オルコットが男性にぶつかる？それこそありえない話ですわ。私の信条は、優雅かつおおらかに…ですので」

「その割にはぶつかった男性に声をかける所か、罵声を浴びせてその場から去っていったではないですか、どこがおおらかなんでしょうか？」

普段やりなれてない口調と言うのは本当に疲れるものだと思いながらも、馬鹿な演技を続ける。そう、アレを出すまで……

「何をデタラメな事を言っているのですか！せっかくこのセシリア・オルコットが下々の者にも優しく接しようとわたくしの方からわざわざ声を掛けたというのに……」

「でもさ、あなたが本当にセシリア・オルコットって証拠はあるの？」

あぁ…口調を変えるのに限界が出てきた…アレを出すのが楽しみでしょうがない。

「な…！！言うに事欠いてそんな恥知らずなセリフを吐くとは……結構ですわ、そこまで言うのでしたら、わたくしがセシリア・オルコットである証拠をお見せしましょう」

そういって、セシリア？と言う人はポケットの中にゴソゴソと手を入れて、ある物を探し始めた。見つかるはずのない物を。

「あ…あれ？どうしたのでしょう…確かに、このポケットに入れておいたはずなのに……」

「あ、そうそう、俺の名前を言うのを忘れてた。自己紹介して貰ったのに俺が名前を言わないのも失礼な話だ。俺の名前はセシリア・オルコットって言うんだ」

「「はぁぁぁ！？」」

今度はセシリア？と一夏がハモっていた。やばい…もう限界……

「っぷ…く…くくく……」

「あ、あなた！ここまで人を侮辱しておいて…！！一体どの様に責任を取ってもらえますの！？」

怒りの余り怒鳴り散らすセシリア？、急展開についていけない一夏、

さて…ここらで行きますか……！

「じゃあ俺がセシリア・オルコットである証拠を見せよう」

そして俺は、今朝俺の鳩尾にキレイに拳をぶち込んでくれた張本人が落としていった『生徒手帳』を取り出した。

「ほい、書いてあるだろう？セシリア・オルコットって……」

「〜〜〜〜！？！！」

生徒手帳の名前を顔写真を確認したセシリアは顔を真っ赤にして、俺から生徒手帳を奪い取った。

「あ…あぁ…あなたぁぁぁ！！い、一体これを何処で……！！」

「だから、さっき言っただろう？曲がり角で男性にぶつかった事を知ってるって、そりゃあぶつかった本人なんだから覚えてないわけないだろう？それに、ソレ（生徒手帳）はその時にお前が落としていった物だ。あぁ…実に見事に俺の鳩尾に入ってたよ…お前のグーパンが……」

それは、今まで自分が言った事は全部嘘ですと、周りクラスメイトに教えたようなものだ、ここまで上から目線でなければ他の返し方

があったのだが、もう後の祭りだ。所々で、ヒソヒソ話が聞こえる。あぁ…確かこういう話題って女性の間だと凄い勢いで拡がっていくんだよなぁ…

「屈辱ですわ！！この責任をどうやってとって……」

キーンコーンカーンコーン♪

おぉ、なんというタイミング、たった今休み時間が終わった、次の授業の担当は鬼軍曹？の織斑千冬先生である。席に戻らないと、生贄が出てしまう……

「あなた！絶対に覚えてらっしゃいね！このセシリア・オルコットに楯突いた事を後悔させてさしあげますわ！！」

物凄い剣幕で俺を睨みながら、セシリアは席に戻っていった。そして鬼将軍（織斑先生）の授業が始まった。

「授業を始める、だがその前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

ちなみにクラス代表者とは、ほかの学校で言う学級委員の事だ。対抗戦以外にも生徒会の会議や委員会への出席にも参加する、今回は

入学時点での各クラスの実力推移を測るものであるが、競争させることで発生する向上心を生む事の方が大きな意味合いを持っている。

「自薦他薦誰でも構わん。一年間は変わらないからそのつもりでな。」

良い意味でクラスのまとめ役、悪い意味で面倒の押し付け合い。こういうのはなりたい奴となりたく無い奴と真っ二つに別れる。俺？勿論後者だ。

いくらＩＳに乗れる一夏でも、今回は出番は無いようだ。涼しげな顔をしている……だがその涼しげな顔は次の瞬間崩れ去る。

「はいっ。織斑君を推薦します！」

「私もそれがいいと思いますー」

うん、あれだ、自薦他薦を問わないと言う事は面倒な事は自分に押し付けられる前に相手に押し付けてしまえば良い、良い意味でも、悪い意味でも学園中の注目の的織斑一夏、これ以上の人材（生贄）はこのクラスに存在しなかった。

「はい！俺も一夏を推薦します！」

「っておい！蒼真まで！？」

「悪いな…一夏……人間時には辛い判断をしなきゃいけない時があるんだ…！」

よし！俺はこれで安全牌確定、一夏、頑張ってくれ、それにハーレ(地)ム(獄)だ、きっと良い事はある。クラス中が一夏コールを始めたその時、

ダァン！

「納得行きませんわ！」

この一夏コールの中、机を叩いてクラスの視線を一点に集め、セシリア・オルコットは言い放った。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

すげぇぞ、セシリア…今のお前なら地方選挙で当選出来るかも知れない……

「実力からして、私の方がクラス代表になるのは必然。それを物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までＩＳの技術を修練にきたのであって、サーカスを

する気は毛頭ございませんわ！」

女尊男卑のこの社会情勢においても、流石にそれは言いすぎだろう……一夏もイライラしている様子だった。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなければ行けない事自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛でしかないのに……」

カチン……！

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「イギリスって確か極西の島国だったっけ…あんな文化的に後進的な国に生まれなくて良かったわ～米最高～！日本食万歳～！」

蒼真と一夏が初めてシンクロした瞬間だった。だが問題はその後だった。

「あっあっ、あなたたちはわたくしの祖国を侮辱しますの！？」

自分だって散々俺達（日本）の祖国の事を侮辱したくせに……

「決闘ですわ！」

「おう。四の五の言うより分かりやすい」

「上等だ。ぶつかって謝罪の一言も言えないような奴に代表なんて任せられるか！」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたら私の奴隷にしますわよ？」

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「そう？何にせよちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの実力を示すまたとない機会ですわね！」

「じゃあ、何で勝負する？」

「はぁ？ＩＳに決まってるだろ？」

「はい？ＩＳに決まっているでしょう？」

あれー？、俺ＩＳ乗れないんだけど、どうしたらいいんだろう……

「別に私は２対１でも一向に構いませんわよ？」

「…俺、ＩＳ乗れないんだけどどうしたらいいと思う？」

「「……」」

教室中が静まり返った……

「分かった！俺は一夏を応援する！」

教室に居る数人がずっこけた。いや、普通に考えて生身でＩＳに勝てるわけないだろ…いくら俺がお守りを持っていて普通じゃないとはいえ、ＩＳには勝てる気しないぞ……

「ま…まぁ何はともあれ決闘ですわ！では、まずハンデはどれ位つけるかから決めましょうか？」

今までの物凄い剣幕すら感じた態度から一変今度は清々しいほどに余裕の笑みで聞いてくる。

「そうだな、俺がどれ位ハンデをつけないと決めないといけないな」

一夏はセシリアを相手に真剣に言うので、俺も同じ様に余裕の笑みを浮かべると……

教室は、爆笑の渦に包まれた…！！え…俺達なんか恥ずかしい事したっけ？とお互い顔を見合わせた。

「お、織斑くん、それ本気で言ってるの？」

「男が女よりも強かったのって、大昔の話だよ？」

「織斑くんは、それは確かにＩＳを使えるかもしれないけど、それは言い過ぎよ」

そこで一夏と蒼真はようやく気が付く。今の世の中は男性が圧倒的に弱い、世界最強平気であるＩＳが女性にしか乗れない時点で男性陣はぐぅの音も出ない。
その為にＩＳ搭乗資格研究機関が設立されたと言う事をたった今思い出した。

「じゃあ…ハンデはいい」

「あら？泣いて頼むのであれば今からでもハンデをつけて差し上げてよ？」

セシリアが嘲笑混じりで提案をしてくる。

「分かってないな、セシリア」

「あぁ、全くだ、分かってないなセシリアは」

俺と一夏は既にその答えが出ている。この答えには男も女の関係ない。

「わたくしが、一体何が分かってないと？」

その質問に蒼真が即答する。

「真剣勝負にハンデなんてつけてる時点で真剣勝負じゃない。そんな勝負は勝つ意味が無い」

一夏と一緒に真顔でセシリアを睨む。

「ああ、蒼真の言う通りだ、俺もハンデつけるなんて言って悪かった。思う存分全力で掛かって来い。負けても文句言うなよ？」

セシリアは2人の揺るがない姿勢に少しだけ頬が緩んだ。

（この極東の島国には、女性に屈しない男性が居たのですね、少しだけ感心しましたわ）

「分かりましたわ。ではハンデ無しで、そちらこそ、負けたら奴隷ですからね？」

「よし、話はまとまったな。それでは、勝負は一週間後の月曜日、放課後第三アリーナで行う。織斑とオルコットは準備をしておくように」

～放課後～

「おい！一夏！」

一夏と2人で歩いて居ると、クラスメイトの女子が話しかけてきた。

「あぁ、箒じゃないか。どうしたんだ？」

「どうしたもこうしたもあるか！いきなり代表候補生と決闘など…！まぁいい…それはともかく、決闘が決まったんだ。今から剣道場まで来い」

「なんでだよ？」

「腕が鈍ってないか見てやる」

「一夏って剣道やってたの？」

「あぁ、小さい頃にな……」

「と言う事は2人は幼馴染？」

「ま…まぁそういう事になるな…一応…あぁ、自己紹介が遅れたな、篠ノ之箒だ。これからよろしく頼む」

「俺は、鬼頭蒼真。よろしく」

「では、蒼真、そういうわけで一夏を借りるぞ」

気になった、一夏が剣道をしているという事に、『あの日』から剣と言う物に興味を持たざるを得なくなった俺から見れば、一夏の剣道を見たくてしょうがなかった。

「……見学しても良い？」

「蒼真、剣道に興味あるのか？」

「まぁ剣は男が憧れるもの、なら剣道に憧れるのもまた自然と言う事さ…」

「ふむ、道理だな、まぁいいだろう。見学位なら」

そして俺達3人は剣道場へ向かった。

～剣道場～

「どういうことだ」

「いや、どういうことって言われても……」

剣道場に移動して、武具を装着して一夏と箒が手合わせを始めて１０分。その間に、一夏は見事な一本負けを露呈していた。

「何だろう…俺すっごく不安になってきた……」

蒼真の気持ちとは裏腹に箒が一夏を質問攻めにしている。

「どうしてここまで弱くなっている！？」」

「受験勉強してたから、かな？」

「……中学では何部に所属していた」

「帰宅部、三年連続皆勤賞だ」

その言葉を聞いた途端、蒼真の目には箒の背後に角の生えた何かが見えた…

「なおす」

「…はい？」

「鍛えなおす！ＩＳ以前の問題だ！これから毎日、放課後三時間、私が稽古をつけてやる！」

「え。それはちょっと長いような…というか俺は剣道よりもＩＳの事を色々とだな……」

「だから、それ以前の問題だと言っている！」

すげぇ、取り付く島もない…だが、ＩＳの性能が互角の場合、次に重要なのは自分自身の能力だ。箒が言っている事も蒼真には納得が出来た。

「蒼真…助けてくれ…！今の俺には剣道よりＩＳの方が……」

一夏が俺に救いを求めている、だがすまない、今の俺は役に立てそうにない…俺は我が子を谷底に落とす思いで一夏を裏切った。だって奴隷は流石に嫌だ……

「良いんじゃない？結局ＩＳに乗れても自分が強くなかったら、結果的には負けちゃうし、Ｆ１マシンを持っててもドライバーの腕次第って事だろう？箒が言いたいのは？」

「その通りだ。一夏、お前の友達は理解が早くて助かる」

「いやな。俺もそれには納得なんだが、まだ一回しかＩＳを起動させたことが無いから、その次も上手く行くかっていうのが…」

「そんな弱気な事でどうする！その根性から鍛えなおしてやる！」

（俺は一夏を生贄にするしかなかった、すまん…！決闘が終わっても俺が奴隷じゃなかったら、何か奢るから許してくれ……）

心の中で侘びを入れながら、蒼真は剣道場を後にした。

第1話：極東の国と極西の国（後書き）

久々に書いているので、矛盾点や書き間違い等があると思います。
もし見つけてくださった場合は感想にてコメントをいただけるとありがたいです。

次回はセシリアＶＳ一夏！さぁどうなるか！お楽しみに！

第2話：セシリアＶＳ織斑一夏

〜自室〜

「酷い目にあった……」

「でもそれって一夏が弱いからじゃない？」

一夏が箒にボコボコされて帰ってきた最初の一言がこれである。まぁ、箒本気で怒ってたみたいだったしなぁ、むしろ昔の一夏はそれだけ強かったと言う事だろう。
男としては、一度一夏と手合わせしたいものだ。むしろ、今度誘ってみようかな……

「蒼真〜…酷いぜ、流石に……」

「でも、幼馴染と良いスキンシップになっただろう？」

「アレはスキンシップじゃない……」

たしかに、あの剣幕からするととてもスキンシップとは言えないだろうが、それをスキンシップに出来るかどうかは一夏次第だろう。

「そういえば、蒼真ってなんでＩＳ学園に来たんだ？」

「ん…？あぁ、俺は元々ＩＳに人一倍憧れを感じていて、出来る事なら自分で乗ってみたいと思ってるのさ、その熱意をＩＳ搭乗資格

研究機関が買ってくれてな…まぁちょっとしたコネ見たいな物だ。まぁ別のも理由があるが…知りたい？」

「んー…どっちでも良いが気になるな、当たり障り無い無いなら教えてくれよ」

ＩＳ学園の寮は夕食を取った後は寝るまで自由時間、外出以外は何もしていても良いが、まだ学園にも慣れてない上に、廊下に出ると下着姿当然の男の目線を一切気にしない、服装で女子が出歩いている。

そのせいもあって、この部屋の男２人は極力部屋の外に出ようとは思わなかったので、寝るまでの間は暇なのだ。

「白騎士事件って知ってるよな？」

「ああ、勿論知ってる」

白騎士事件とはＩＳが発表されてから約１ヵ月後に起きた事件である。日本を射程範囲内とするミサイル基地のコンピューターが一斉にハッキングされ、２３４１発以上のミサイルが発射されるも、たった一体のＩＳ「白騎士」がそのミサイルの半数を迎撃、それを見て「白騎士」を捕獲もしくは撃破しようと各国が送り込んだ大量の戦闘機や戦艦などの軍事兵器の大半を撃破した事件。この時の死者は皆無だった。この事件以降、ＩＳの関心が高まることとなる。

「それがどうしたんだ？」

「その時に、俺は白騎士に出会ってたんだ」

「あの白騎士に！？またなんで…」

「運が良かったのか悪かったのか、俺はミサイルの爆心地に居たんだ。俺の両親は小さい頃から海外赴任でな、一人暮らしだった。だが、ニュース関係を一切見ていなくてな、避難指示の出ていた地域にその日、俺は居たんだ」

「それで？」

「白騎士がミサイルを迎撃する瞬間を見た。そして、俺はそれに巻き込まれた」

「え……それって……」

「あぁ、巻き込まれた俺は吹っ飛んでどっかの瓦礫に突っ込んだ。幸いにも居た場所が壁が多かったから吹っ飛ばされるだけで済んだ。だが辺り一面は灼熱地獄だった。いくら白騎士と言えど、住宅街で迎撃を行った場合は、被害を最小限に抑える事しか出来なかったのさ」

「それで、蒼真はどうなったんだよ…」

「ただただ熱かった、朦朧としていたが意識はあった。そして確信してた。俺はここで死ぬんだ…と１００発以上のミサイルが一度に爆発したんだ。そんな場所で生きている事自体が不思議だった」

「じゃあ、なんで今ここに居るんだ？」

「その時さ、俺は白騎士（ヒーロー）に出会った。顔は隠れていたが、白騎士が来た時、急に息苦しさと熱さが無くなった気がした。相変わらず意識は朦朧としていたが、「すまない」と言う声が聞こえた。そしてこれを貰ったのさ」

そして、一夏に「お守り」を見せる。其れは掌に収まる程の小さな白色の剣だった。

「なんだ？それ？」

「白騎士に貰った、俺のお守りだ」

「え……マジ……？」

「あぁ、これを貰った時に言われたのが、決して無くすな、誰にも渡すな、そうすればこの剣がお前を守ってくれるって…」

「なぁ…触ってもてもいいか…？」

「あぁ、一夏なら問題ないさ、ちなみにオフレコな？大体の奴は言っても信じてくれないからいいんだが、一応な…」

そう言って、「お守り」を一夏に渡す。

「へぇ…これが白騎士から貰ったお守りかぁ…」

トクン…トクン…

「…？」

一夏がお守りに触れた時何かが反応した。まるでこのお守りが一夏を懐かしんでいるかのように……

「ん？一夏？どうした？」

「あ、あぁ…なんでもない、大事なものだろう？アクセサリーか何かにしておけば？」

「あぁ私服の時はそうしてる。けど制服姿じゃ無理だからな、でもこれを貰ったときから不思議な事が結構起きてるんだ」

「不思議な事？」

「あぁ、怪我してもすぐ治るわ、風邪とかの病気にはならないわ、本当に守ってくれてるみたいな気がするんだよな、それにどれだけ無理をしてもガタがこないんだ」

「ガタ？」

「そう、人間って言うのは無理を続けると何処かしら体が悲鳴を上

げるものだろう？それが一切来ない、ビックリする位」

「つまり、筋肉痛とか腰痛とかそういうのが来ないのか？」

「まぁ腰痛って言うのは爺くさいけど、そうだな、そんな感覚でいいと思う。以前何処までやったら自分の限界が来るのだろうって色々試したんだが…」

「全部無駄に終わったと…」

「まだ答えを言ってないのに先取りしないでくれ…まぁ事実だからいいんだけど…そういう不思議な事も起こってるし、これがただのお守りじゃない事は確かなんだが、ＩＳと関係しているのか分からない、こんな所だ。無茶しても大丈夫なお陰で、体は相当頑丈になったけどな」

「いっそ、そのお守りを学園で調査してみれば分かるんじゃないか？」

ＩＳ学園は多数のＩＳを管理している環境上、そういう設備は整っている。調べればそのお守りが何なのか分かるかもしれない。

「それも考えたんだが、誰にも渡すなって言われてるしな、一夏の事は信頼してるから、渡したんだぞ？特別なんだぞ？」

「蒼真、そういう風に特別扱いしているって信頼感を醸し出そうとしても、今日助けてくれなかった事は俺は忘れないぞ？」

むむ…上手く話題をすり替えられたと思ったが、中々手厳しい、それともよっぽどコテンパンにされたんだろうか…？

「けど、信頼してるって所は嬉しいぜ。だからそのお守りを見せてくれたんだろ？よし！だったら、明日から気合を入れて稽古してもらわないとな！」

「あぁ頼むぜ？学園生活が始まって1週間で奴隷生活なんて勘弁して欲しい……」

そうやって2人は笑いながら絆を深めていった。そして決戦の月曜日がやってきた。

～第三アリーナ待機室～

「織斑くん！織斑くん！織斑くん！やっと来ましたよ！織斑くんの専用ＩＳが！」

決闘直前に山田先生が慌ててやって来た。世界初の男のＩＳ操縦者

と言う事で、実験やらデータ収集の為に、一夏は政府の援助により専用のＩＳが支給される事になっていたのだが、実の所いつまで経っても来ないので、昨日までは訓練機でやるのかな？という話をしていた位だ。

「織斑、すぐに準備しろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶっつけ本番でものにしろ」

え…ちょっと待ってくれ、幾らなんでも、それは厳しいんじゃないか？千冬姉……

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えて見せろ。一夏」

箒、確かにお前には世話になった。お前が居なかったら、ここまで早く剣道の感は取り戻せていなかっただろう、だが、それとこれは別問題じゃないか…？

「おい、何をしている。まさかここまできて逃げるのか？」

「いや、逃げねぇ。ここで逃げたら男じゃない」

ありがとう千冬姉、やれる事はやった。なら後はその成果を存分に発揮するときだ。結果的に負けようが、それは価値のある負けだったと言う事だ。

「なぁ一夏？お前今、これで負けても価値のある負けとか思ってないよな？」

蒼真、お前のそのお守りはエスパー能力に目覚める事が出来るのか？すこし欲しくなってきたぞ…
ＩＳの装着が終わる。そして世界が変わる。

「すげぇ、これがＩＳ……」

「そうです、織斑くん専用のＩＳ『白式』です」

この感覚はＩＳに乗った者ではないと味わえないだろう、乗ってない時では簡単に見落としてしまいそうな世界の変化を感じ取れるような感覚……おまけに３６０度全方位見える。一体どうなってるんだ…？

「ほら」

突然、蒼真からある物を渡される。それは間違いなく「お守り」だった。え？ひょっとしてちょっと欲しいかも…って気持ちまでエスパー！？

「蒼真…これ……」

「…あくまで貸すだけだ、決闘が終わったら返してくれ。ひょっとしたら、何かの役に立つかもしれないだろ？」

蒼真がこの「お守り」をどれだけ大切にしてるか俺は知っている。だったら、それを受け取ったのなら、もう負ける事なんて考えない。

「よし、勝ってくる！」

「「「当たり前だ！」」」

一夏は自分を激励してくれた3人を背に敵へと向かって行った。

～第三アリーナ～

「あら、逃げずに来ましたのね」

ふふん、とセシリアが鼻をならす。セシリアの中では負ける事は有り得ないのだろう。そういう自信の表れだった。

「最後のチャンスをあげますわ」

余裕の表情と姿勢を持ってセシリアが提案してくる。お前なんか敵ではないと手にした銃口をあらぬ方向に向けている。

「チャンスって？」

セシリアの性格からして大体想像が付くが、一応聞いておこう、世の中には天変地異が結構起こる。

「わたくしが、一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここであやまるというのなら、許してあげないこともなくってよ」

大体予想していた通りだ。なら問題は無い。俺達は許して貰うような事していない。

「そういうのはチャンスって言わないな、それに俺の友達にぶつかっておいて謝ってないのも気に食わない、謝るのならまずはそっちのはずだ」

「そう？残念ですわ。余計な一言が無ければ、少しは手加減をして差し上げようと思っていたのに」

その言葉が言い終わる前に、セシリアは撃ってきた。その閃光が一夏を撃ちぬいた。

「うおっ！？」

咄嗟に手でガードしたが、ダメージはあったようで、シールドエネルギーが削られている。ＩＳの戦闘の勝敗はシールドエネルギーを先に０にした方が勝ちとなる。
一夏は早速先制攻撃を食らった。

「クソ…前もって情報を見ていたのに…！」

ＩＳのコアはコアネットワークと言う物で繋がってる。このネットワークを介する事により、相手のＩＳの名前、搭乗者、得意攻撃範囲、特殊武装の有無等を確認できる。

「あらあら、あなたのＩＳは近接ブレードしかありませんの？良くそんな装備だけで、このわたくしと戦おうなどと思いましたね？」

セシリアのＩＳから特殊武装が展開される。それはＢＴレーザーシステム、命令を送る事で複数のＢＴを同時に動かし、１対多を相手に想定された特殊武装（ブルー・ティアーズ）である。

「さぁ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー（蒼）ティアーズ（雫）が奏でる円舞（ワルツ）曲で！」

そして、一夏はその円舞（ワルツ）曲に招待された。

「くそ…！」

唯一の武器である、近接ブレードを展開して、迎撃を試みるが、ブルーティアーズからの射撃は弾雨のそれだ。絶え間の無い射撃の雨、近接ブレードで弾けるのは、精々致命傷になりそうな数滴のみ、セシリアによる一方的な攻撃だったが、一夏は懸命にその弾雨を避け続けた。

「二十七分。持った方ですわね。褒めて差し上げますわ」

余裕の笑みのセシリアとは対照的な満身創痍の一夏、雨と言うものは傘（盾）が無いと濡れてしまう。傘（盾）を持っていない一夏は当然ずぶ濡れ状態だった。

「初見で此処まで耐えたのはあなたが初めてですわ、思ったより骨はあるみたいですわね…ですが、そろそろ終わりにしましょう」

白式のエネルギー残量はもう少ない、後1～2発攻撃を食らうか、絶対防御を発動させられたらエネルギー残量は0、俺の負けになるだろう。

絶対防御とは、ＩＳの搭乗者を守る最後の砦、シールドが破られ、攻撃を直接食らった時に発動する。
発動しない場合もあるがそれはＩＳが判断をする。あらゆる攻撃も受け止めるが、シールドエネルギーを極端に消耗する。そして今の一夏の装甲は１／３まで削られている。当たり所によっては絶対防御が発動する可能性は大いにある。

「では、さようなら」

セシリアの攻撃が再開する。４機のＢＴレーザーを懸命に回避するが、回避した場所を狙ってセシリアはライフルを撃ってくる。

「左足、いただきますわ」

左足の装甲は既に失っている、今食らえば間違いなく絶対防御を発動させるだろう。畜生…！こんなところで終われるか！こうなったら一か八か…！

「うおおぉぉ！！」

ガキィン！

派手な音と一瞬の火花、捨て身の加速はセシリアがトリガーを引く直前で一夏と衝突し、砲口をずらし、一撃を免れる。

「なっ！無茶苦茶しますわね。けれど、無駄な足掻きっ！」

すぐさま距離をとり４機のブルーティアーズ（BTレーザー）を一夏に向かわせてきた。そして、その一斉射撃により一夏の負けが確定するはずだった…が

「そこだ！」

穿たれるレーザーをくぐり抜け一夏は近接ブレードで一閃する。そして、初めて手ごたえを感じる。その手ごたえを与えた物体は真っ二つにされその場で爆散した。

「なんですって！？」

一夏は驚いた事で隙が発生したセシリアに追撃を仕掛ける。

「っく…！」

だた、セシリアは後方へ回避をし次のビットを一夏に向かわせるが、それより早く一夏がセシリアの懐に潜り込む。

「っな！？」

驚愕のセシリア、ライフルで牽制し何とか一夏と距離を取る。

「分かったぜ、ブルーティアーズの弱点」

一夏ははっきりと言い放った。その発言にセシリアが顔をしかながらもビットを向かわせる。

「この兵器は毎回お前が命令を送らないと動かない！しかも……」

ビットの軌道を先読みし、１機切り落とす。

「その時、お前はそれ以外の攻撃を出来ない。制御に意識を集中さ

せてるからだ。そうだろ？」

言い終わると同時にビットが爆散する。どうやら図星のようだ。それに、一定の法則性も見つけた。あれは、必ず俺の反応が一番遠い角度を狙ってくる。

人間では全方位３６０度の視界なんて有り得ない。故に、見えていても反応が遅れる角度がどうしても存在する。そこを的確についてくるのがあのビットだ。なら、それを逆手にとってしまえばいい。勝利への道筋が見えてきた…！

「はぁぁ……。すごいですねぇ、織斑くん」

待機室では山田先生を含む４人がビットから送られるリアルタイムモニターを見ていた。

「あの馬鹿者。浮かれているな」

「何処が浮かれてるんですか？織斑先生」

「左手を見てみろ、さっきから閉じたり開いたりしているだろう。あれは、あいつの昔からのクセだ。あれが出るときは、大抵簡単なミスをする」

「織斑先生…洞察力すごいっすね……」

一夏が盛り返し始めた事に興奮していた蒼真はそんな事全く気が付いていなかった。蒼真自身こんな間近でＩＳ戦闘を見るのは初めてである。それだけでも興奮しているのに、他事に注意など行くはずがない。

「でも、流石姉弟ですね。そんな細かいところまで分かるなんて」

「ま、まぁ、なんだ。あれでも一応私の弟だからな……」

「へぇぇぇ～照れてるんですね～織斑先生」

「……」

ぎりりりっ……

織斑先生が顔を赤くしながら山田先生をヘッドロックしていた。中々見れない光景だが、今はそれよりも決闘の方が気になった。

「っへ…いただくぜ！」

完全にブルーティアーズを攻略して俄然強気の一夏、その自信に満ちた行動はセシリアを追い詰めていった。残りの２つビットを破壊し一気に勝負を着けに行く。近接戦闘棒にしかは役に立たないライフルでは、近接ブレードの前では無いに等しい……だが、

「……かかりましたわ」

一夏はその声に反応するが、既に遅かった。セシリアの腰部分から拡がるスカートアーマー。その突起が外れて、動いた。

「おあいにく様、ブルーティアーズは6機あってよ！」

回避の間を与えずにビットは射撃を行う。しかもそれはレーザーではない、『弾道型（ミサイル）』だった。シールドエネルギーに余裕のあるセシリアは、自爆行為を行った。この程度の爆発なら自分なら耐えられると言う計算だ。だが一夏には耐えられない、これを食らえば終わりセシリアの勝ちが確定する。

ドオォォン！！

そして、その一撃は一夏を直撃した。黒煙が晴れる、セシリアはこの時既に勝利を確信していた。一夏の姿を見るまでは…

「ふん、機体に救われたな、馬鹿者め」

「？？？」

蒼真と箒にはわけが分からなかったが、それは直ぐに分かるものとなって姿を現した。

――――初期化（フォーマット）と最適化（フィッティング）が終了しました。

一夏のＩＳの形が変わっていた。今までは違った中世の鎧を連想する姿に……

「ま、まさか……一次移行（ファーストシフト）！？あ、あなた、今まで初期設定だけの機体で戦っていたって言うの！？」

セシリアが相当驚いている。だが、ＩＳにまだ2回しか乗った事のない俺には言っている言葉の意味は良く分からないが、はっきりと分かる事がある。

これでやっと、この機体は俺専用になった。

装甲が変化している。そして、武器も変わった。

――――近接特化ブレード雪片弐型（ゆきひらにがた）。

雪片……それは、かつて千冬姉が振っていた専用ＩＳ装備の名称。
やはり、姉弟、血は争えないのかもな……それに

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

今まで、ずっと守られてきた。千冬姉とこの雪片に…そして今、その雪片が俺の手にある。千冬姉今までありがとう。そろそろ、守られるだけの関係を終わりにしよう。これからは―――

「俺も、俺の家族を守る」

一夏の決意は言葉に出ていた。

「まったく、生意気を言うようになったものだ…馬鹿者め」

その姿を誇らしげに見つめる姉の姿が其処にあった。

「はあぁぁぁ！」

動く、一次移行（ファーストシフト）をする前とは全然違う。センサーの感度や解像度が大幅にアップしている。手の中でエネルギーがその密度を増していくのを感じる。そして、其れは光となって刀身に現れた。そのエネ

ルギーは一夏の勝利をもたらす光だと一夏は理解できた。

勝てる。この一撃を叩き込めば――――

ドクン…！

何かが、支えてくれている。この支えがあれば、この光は更に輝き放つことが出来る。その確信が俺にはある、そして俺は、セシリアに下段から上段への袈裟払いを放った。

『――試合終了。勝者――織斑一夏』

そして、気が付いたとき、俺は勝利していた。

第2話：セシリアＶＳ織斑一夏（後書き）

はい、原作ブレイカーしました。
しかし、これはオリジナル設定を適用させた結果なので、その設定はこの物語を読んでいけば、その内分かるようになっています。

では次回をお楽しみに

第3話：勝利の後の休息の一時

「いえぇーい！」

決闘が終わって、蒼真と一夏は待機室で腕を上げ手を叩きあった。

「それにしても一夏、こっちはヒヤヒヤしたぜ？最初あんだけ一方的だったからな」

「俺も、勝てる気がしなかったんだけど、暫くしてたら、パターンみたいなものが見えてきてな、結果的に何とかなったんだ」

以前山田先生がＩＳは操縦者を理解し、より動きやすく自己進化すると言っていた。その結果、一夏はセシリアのビットの動きの法則性に気がついなのかもしれない。

「いやぁ…それにしても、入学早々奴隷にならなｋ……」

「一夏！！」

蒼真の言葉が掻き消されるほど大きな声で箒が一夏の名前を呼びながら抱きついた。

「ほ…箒！？」

突然抱きしめられ、驚くのと同時に女の子特有の胸の膨らみを意識して少し顔が赤くなる。

「まったく、勝てたからいいものを……本当に心配したんだぞ…」

「あぁ悪かったな、心配掛けて、箒にしごかれた事で勝利できた。ありがとう」

「しごかれた…だと？あの程度で……？」

箒がすっと一夏から離れる、その背後から出ているオーラは蒼真には恐ろしくて直視が出来ないほどだ。その時蒼真はこう思った。

（一夏……俺はお前の事を忘れない……ずっと……）

「一夏！！！」

「は…はい！！」

箒の剣幕に思わず返事をしてしまう一夏。

「あの程度でしごかれたとはなんだ！鍛錬が足りない証拠だ！明日からは鍛錬の時間を倍にする！」

「え…えぇぇぇ！！？」

「ええい…！今からその根性を叩きなおしてやる！」

ＩＳを解除した一夏が箒に連れられていくが、それは千冬によって止められる。

「待て篠ノ之、織斑はこっちにこい、ＩＳの破損状況を確認しろ。場合によっては修復に時間が掛かる」

「あ、あぁ分かったよ、千冬姉」

ガン！

また、一夏の脳細胞が５０００個死んだ。

「勝ったからと言って調子に乗るんじゃない馬鹿者、織斑先生と呼べ」

「はい…織斑先生」

「分かればいい」

～セシリア自室～

「はぁ……どうしてでしょう……」

セシリアはバスルームでシャワーを浴びていた。先ほどの試合で負けたと言うのに、悔しさと言うものを感じていなかった。セシリアにとって男性と言うのは父親以外余り面識が無かった。そして、その父親は母親に全く頭が上がらなかった。ＩＳが発表され女尊男卑になると、更に拍車が掛かった。

そんな父親を鬱陶しがっていた母親は、ついに父親と別居で暮らすようになった。だから自分は『情けない男とは絶対に結婚をしない』と言う事を心に誓っていた。そして、今回世界で初めてＩＳに乗れる男が自分の通うＩＳ学園と言う場所で同じクラスになった。

世界で初めて自分（ＩＳに乗れる）と同じ立場になった男性に期待していたのだ、きっと、父親の様な情けない男ではないと。

最初は情けないと思っていたが、彼（一夏）は決して、自分の意思を曲げなかった。ハンデも付けなかった。何より、瞳が力強かった。それは自分の憧れていた男性に他ならなかった。

「織斑…一夏……あ、後もう一人居ましたわね…」

一夏と一緒に居たもう一人の男、はて？名前は何だっただろうか、彼はＩＳに乗れないと言うのに決して自分の意思を曲げようとせず……？あ……違う、彼は今朝自分がＩＳ学園に登校する際、曲がり角でぶつかったのだ。

あの時は入学式の首席スピーチに遅刻しそうになり、イライラして何かを喋ったのろう。
自分では覚えていないが、おそらく侮辱的な内容だったのだろうと、自分の中で反省する。

「謝らないと、いけなくなりましたわね……」

そう呟くと、セシリアはシャワーを止めた。

～一夏・蒼真自室～

「いやぁ、それにしても本当に良く勝てたもんだ……次は絶対負けるな」

「一夏、勝っておいてそのセリフは無いと思うぞ……」

「あ、そういえばこれ返すな」

そう言って一夏は「お守り」を蒼真に返す。

「ありがと、余り役に立たなかっただろう？」

「いや、そんな事ないと思うぞ？最後に雪片で切った時は、このお守りが支えてくれてる感じがした」

「そっか……少しでも役に立ってくれたのならよかった、だがこれっきりだからな？」

「奴隷にならなくて済んだしな？」

お互い笑いながら勝利の余韻に浸っていた。

コンコン……

突然、ドアが叩かれた。大体こういう場合は近くの部屋の女子が遊ぼうよ～と声を掛けてくるが、それにしては時間が遅い。もう就寝時間間近である。

「誰？」

「わ…わたくしですわ」

声からすると、セシリアである。まさか、決闘第２回戦目と言うわけじゃないだろうな？５回勝負なのですから、１回目は小手調べですわ！なんて言われそうだ…

「……何時までレディを廊下に待たせるつもりですの？」

色々考えていたら、文句を言われた。規則によって、緊急時以外に許可無くＩＳを展開する事は禁じられているので何かあると言う事はおそらく無いだろう。そう思いセシリアを通した。

「夜分遅くにお邪魔いたしますわ」

蒼真もまさか、セシリアが来るとは思っていなかったらしくビックリしている。

「まずは謝りますわ、あなたたちの祖国を侮辱して、申し訳ありませんでした」

一夏と蒼真は目の前の出来事が信じられない。あの高飛車で目立ちたがり屋で世の中の男をすべて見下しているとも感じられるセシリアが部屋に入って来た途端一夏達に向かって頭を下げて謝罪をしたのだ。

「え…あ…まぁなんというか、俺も少し言い過ぎたよ…悪かったごめん」

決闘に負けたのら謝ると約束をしていたが、いざ謝られると自分達も少し言い過ぎたなぁと反省するのだった。

「それに関しては俺も謝る。それにイギリスにはちょっとした憧れがあるんだ。その憧れを壊された感じがしてな…つい言い過ぎた」

セシリアは2人の言葉を聞いて、首を縦に振った。

「それに…あなたには別の事でもお詫びをしなければいけません。わたくしは貴族だと言うのに礼節をわきまえていませんでした。今朝方、確かにわたくしはあなたと衝突しました」

セシリアは教室で言っていた事を嘘だったと自ら認めた。

「そして、倒れるあなたに罵声を浴びせたまま走り去りました。こ

れは貴族として考えられない行為です。大変申し訳ありませんでした」

「……謝罪だけ？」

だが蒼真は謝罪だけでは満足がいかなかったようだ。

「蒼真！？セシリアは謝ってるんだぞ？何もそこまで言う事は」

「いえ、一夏（いちか）さん、構いません。それにわたくしはプライドを守る為に嘘までつきました。今回は物証がありましたが、無かった場合は「嘘吐き」と呼ばれ信頼を失う事になっていました。それについては謝罪だけではすまないでしょう」

そして蒼真を正面から見つめとんでもない事を言った。

「その責任として、わたくしに出来る事をひとつどんな事でもいたしますわ」

セシリアは覚悟していた。許されるのならどんな事でもすると、自分は貴族にあるまじき事をしたのだ。それを許してもらわない限り自分は貴族とは呼べない、それはセシリアのセシリア・オルコット（自分）に対するプライドであった。

「分かった。なんでもしてくれるんだな？」

「ええ、一度限りですがどんな事でも…」

相手は英国貴族でＩＳ学園の入学首席の実力、容姿だってその辺のモデルなんか相手にならない程良い、つまりそういう欲求に関してはこれ以上無い程極上であった。
そして、蒼真の問いは正にそれを連想させるセリフであり、セシリアも覚悟を決めた顔をしていた。

「分かった、ちなみに俺の名前は鬼頭蒼真だ。呼び方は任せる。そして俺の要求を言おう」

蒼真はセシリアに向かって手を伸ばす、一夏はそれを今は黙って見ている。だが蒼真が間違いを起こそうものなら力ずくでも止めるつもりだ。そしてその手は腰辺りで止まる。

「仲直りしよう、そして俺の友達になってくれ」

蒼真は笑顔でそう言った。一夏は緊張を解き、セシリアも笑顔で答えた。

「えぇ、こちらこそ、よろしくお願いしますわ。蒼真さん、何かありましたらこのセシリア・オルコットが相談にのって差し上げます

わ」

最初に見たときは上から目線でキツイ女だと思っていたそのポーズも、今見ると誇らしげでとても頼りがいのあるポーズに見えた。

そうして、一夏と蒼真はセシリアと打ち解けたのであった。

第3話：勝利の後の休息の一時（後書き）

と言う事で次回は鈴が登場しますね。
では、次回をお楽しみに。

第４話：転入生の思惑と蒼真のやる気

「おはよー織斑くん。ねぇ、転校生の話聞いた？」

教室に入ると挨拶と同時に転校生の話題が入ってきた。すごい、昨日は決闘以外の話題が無かったのに、女子ネットワーク恐るべし、その内プライベートがなくなるんじゃないだろうか…

「蒼真は知ってる？」

「ああ、２組に中国の代表候補生が来るんだって、実際に来るのは明日らしいけど」

なぜ知っている。昨日は決闘が終わった後はずっと一緒だったはず、蒼真も一体どういう情報ネットワークを持っているんだ…むしろ俺だけ知らないなんてオチは無いだろうな…？

「席に着け、ホームルーム始めるぞ」

鬼教官こと、織斑先生の登場である。雑談をしていた生徒達は即座に自分の席に戻る。

「今日はＩＳの扱い方を教える。昨日模擬戦闘があったかが見てなかった奴も居るだろう。なので、基本をおさらいしつつＩＳをもっと間近で見てもらう」

と言う事で、全員体操服に着替えてアリーナへ集合した。俺と蒼真は男なので自室で着替えてから全速力でアリーナまで走った。

「遅い」

スパァン！

「時間内に自室から着替えて来るなんて無理です……織斑先生」

「何が無理だ。鬼頭はちゃんと間に合っているだろう」

隣に居るルームメイトは間に合っていた。不思議でしょうがない……どう考えても片道２分掛かり、更に着替えの時間を入れると千冬姉の言った５分以内など到底無理な話である。

「罰として、放課後グラウンド２０週だ」

「はい…織斑先生」

そして、今日の授業のＩＳをもっと間近で見ると言うのは具体的にどういったのもなのだろう？と一夏が考えていると、

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、オルコット。試しに飛んで見せろ」

「はい！」

「わかった」

返事をすると同時にセシリアはＩＳを展開させた、だが一夏はまだ展開出来なかった。

「早くしろ。熟練したＩＳ操縦者は展開まで１秒とかからないぞ」

千冬姉に急かされて、意識を集中する。

（来い、白式）

返事は展開と言う形で返ってきた。またたく間に一夏もＩＳの展開を終える。

「とべ」

言われて、セシリアと同時に上昇を開始するが、セシリアのほうが圧倒的に早かった。

「なにをやっている。スペック上の出力では白式の方が上だぞ」

そんな事を言われても、飛ぶって言うイメージが上手く浮かばないのだからしょうがない。『自分の前方に角錐を展開させるイメージ』らしいが言われたからと言って簡単に感覚がつかめない。

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索するほうが建設的でしてよ」

「そういわれてもなぁ、大体、空を飛ぶ感覚自体まだあやふやなんだよ。なんで浮いてるんだ、これ」

「説明しても構いませんが、長いですわよ？反重力力翼と流動波干渉の話にもなりますもの」

「わかった。説明はしてくれなくていい」

「そう、残念ですわ。ふふっ」

余り残念そうでないセシリアだったが、アドバイスを貰ったしその通りにやってみよう。

「織斑、オルコット、急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地表から１０ｃｍだ」

「了解です。では一夏さん、お先に」

そう言って、セシリアは一直線に地上に向かう。

「うまいもんだなぁ…」

そして、セシリアは難なくクリアーしたらしい。よし、俺も行くか。飛ぶイメージを頭の中で思い描く。白式のブースターからロケットファイヤーが噴射しているイメージ、それを地上に傾けて一気に地上へ目掛け噴射させた。

ギュン！――――――ズドォォン！

俺はセシリアより早いスピードで地上に着くことが出来た。だが、地面には大きなクレーターが開いている。人はそれをこう呼ぶ『墜落』と

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けてどうする」

「一夏！？大丈夫か？怪我とかしてないか！？」

ＩＳに守られていた為自分では実感が無いが、周りからは相当派手に突っ込んだように見えたようだ。

「ＩＳに守られているのだ。怪我はまず無いだろう」

「あら、篠ノ之さん。他人を気遣うのは当然のこと。それがＩＳを装備していても、ですわ。常識でしてよ？」

そう言いながら一夏に手を差し伸べるセシリア、その手を取って一夏は立ち上がる。

「あぁ、俺はなんとも無いし大丈夫だ。心配してくれてありがとな」

「よし、今度は武装を展開しろ。それ位なら出来るだろう」

「は、はぁ」

「返事は『はい』だ」

「は、はい！」

慌てながらも冷静に雪片弐型を展開する。イメージは何も無い空間から剣を呼び出す感じだ。これもまだいまいち感覚が掴めない。

「遅い、もっと早くしろ」

自分では結構上手く行っていたと思っていたのに、この仕打ち、一夏は結構ショックだったようだ。

「次、オルコット」

「はい」

早かった、一夏の2倍、いや5倍程の速さでセシリアは自分のライフル『スターライトmk?』を展開させていた。

「……そのポーズは何だ?銃を横にして誰を撃つ気だ?」

「これは、わたくしのイメージを纏める為必要な……」

「直せ、いいな」

「……はい」

入学首席、代表候補生の実力があろうとも、千冬姉の前では一夏とオルコットはどちらも同じだったようだ。

「次は近接武器だ」

「えっあ、はっ、はいっ」

そう言って少しの時間が経った。その時間は一夏が雪片弐型を展開した時間よりも遅い。

「くっ……」

「まだか？」

「す、すぐです。……あぁ！もう！『インターセプター』！」

ちなみに名前を呼んで武器を出すのは初心者向けの武装展開である。プライドが高いセシリアにとっては屈辱的な事だったようだ。

「一体何秒掛かっている。展開の間敵に待ってもらうのか？」

「実践では近距離の間合いに入らせませんから問題はありませんわ！」

「ほう。織斑との対戦で初心者に簡単に懐を許していたように見えたが？」

「あ、あれは、その……」

《あなたのせいですわよ！》

―プライベートチャンネル《個人間秘匿通信》から文句が来る。

《せ、責任を取っていただきますわ！》

返事を返そうとしても、これまた感覚が分からないので返しようが無い、早いところＩＳに慣れるとしよう……

～ＩＳ学園正面ゲート～

「ふぅん、此処がそうなんだ……」

時間は夕方から夜になる頃ＩＳ学園の正面ゲートに少女が立っていた。基本的にＩＳ学園は関係者以外立ち入り禁止である。しかも、そのレベルは国家レベルと同等の扱いである。
つまりＩＳ学園と言う「国家」と言ってもいい。

まだ暖かな４月の夜風になびく髪は、左右がそれぞれ高い位置で結んである。肩にかかるかかからないくらいの髪は、金色の留め金が良く似合う艶やかな黒色をしていた。

「えーっと、受付は何処だっけ……本校舎一階総合事務受付……ってだからそれがどこにあんのよ」

どうやら少女は噂の転校生らしい、言葉を聞く限り、天上天下唯我独尊、究極のプラス思考、なんとかなる、この全ても持ち合わせていそうな声であった。

「自分で探せばいいんでしょ、探せばさぁ…」

そう思い、ＩＳを展開して空から探す事を思いつくが止める。ＩＳは制限がとても厳しい、許可無く勝手に展開しただけでも下手をすれば、国際問題になりかねない程だ。

「誰か案内できそうな人いないかなぁ～……」

するとその都合に合わせたかのように人の声が聞こえた。

「だから、そのイメージがわからないんだよ」

聞いたことのある声、それは昔懐かしい声、その当時よりは大人びた声、だが、一時もその存在を忘れた事の無い声……初恋の声。

いきなり聞こえた声に少女の心臓の鼓動は一機に加速する。美人になった（と思っている）自分をまさかＩＳ学園に入って一番最初に見せられると思うとテンションは一気に最高潮に達したのだった。

「いち……」

だがそこで少女の声は途絶える。その理由はその人の隣の存在である。

「一夏、いつになったらイメージが掴めるのだ。先週からずっと同じ所で詰まっているぞ」

「あのなあ、お前の説明が独特すぎるんだよ。なんだよ『くいって感じ』って」

「……くいって感じだ」

「だから、それがわからないって言って……おい、待てって箒！」

……誰？あの子、なんで親しそうなの？って言うか何で名前で読んでるの？

さっきまでのテンションや胸の高鳴りは消え、嫉妬にも似た（と言うか完全な嫉妬）感情が雪崩れ込んできた。そして、適当に歩いていた生徒を見つけて目的地まで案内してもらった。

「ええと、それじゃあ手続きは以上で終わりです。ＩＳ学園へようこそ、凰・鈴音さん」

愛想のいい事務員の人の言葉も全く頭に入らない。ただ一つ頭の中を支配している感情に不機嫌になりながら尋ねる。

「織斑一夏って、何組ですか？」

「あぁ、噂の子？１組よ。凰さんは二組だから、お隣ね。そうそう、あの子一組のクラス代表になったんですって。やっぱり織斑先生の弟さんだけあるわね」

鈴は既に前情報として、再来週行われるクラス対抗戦の事を知っていた。そこで思いつく、自分がクラス代表になって一夏をけちょんけちょんにしてやろうと。

「2組のクラス代表は決まってるんですか？」

「決まってるわよ」

「名前は？」

「え？ええと…聞いてどうするの？」

「お願いしようかと思って。代表、わたしに譲ってって……」

とてもニコやかな笑顔で言い放った言葉だが、その内側には「殺してでも奪い取る」と言うオーラが内装されていた。
「ふぅ…やっと開放された……」

織斑一夏クラス代表就任パーティーから解放された一夏が自室に戻ってきた。

「お帰り、主役さん」

「あぁ、女性ばっかりの雰囲気には慣れてきたがまだ、結構厳しいな……、それに明日からはＩＳの特訓にセシリアが加わる事になったよ」

「一夏は余り女性に耐性なさそうだしな、ちょうどいいんじゃない？今後の為には」

「……所で蒼真何をやってるんだ？」

「ん…？筋トレだけど」

そう言いながら手首と足首に重りをつけた状態で腹筋をしていた蒼真が起き上がり、一夏に挨拶をする。

「あー…汗臭い？布にシュシュッとの奴は持ってきてあるから臭かったら遠慮なく使ってくれ」

布にシュシュッとファ〇リーズ……確かに蒼真は汗びっしょりになっているが、部屋が汗臭いとかそういう感じは無かった。

「いや、そんな事ないけど、いきなりどうしたんだ？」

「一夏とセシリアの決闘を見てたらさ…居ても立ってもいられなくなってさ…また不眠不休トレーニングを開始したんだ」

「不眠不休って……健康の上では一日7時間以上寝るのが一番いいんだぞ？使った筋肉を休ませてやらないと無理が生じる」

「なぜか俺ってその「無理」が生じないからな、他の人よりたっぷりトレーニングが出来る。お得だろう？」

「そう言われてもなぁ…やっぱり、そのお守りに何か秘密があるのかなぁ…」

「俺はそう確信してるんだけど…詳細までは分からん、とりあえず、深夜先生達に見つからないように外でトレーニングしてくるから、隠蔽工作をよろしく」

「って蒼真本当に不眠不休でやる気か！？千冬姉の授業中に居眠りなんてしたらグラウンド５０週は……」

考えるだけでゾッとする。あの千冬姉（鬼教官）の事だ。それこそ教科書1冊の内容を丸々覚えて来いなんて言われても不思議じゃない。むしろ俺が想像すら出来ない拷問

じみた事まで言ってきそうだ……

「大丈夫だって、土日は普通に睡眠とるから」

「おいおい……それってとんでもない事だって分かってるよな？」

「”これ（不眠不休）”が出来るからこそ、あの機関の中で選ばれ、ＩＳ学園に入る事ができたのさ、確かに高校受験は全部落ちて、泣きついたのは事実だけど、それだけで本当にＩＳ学園に入学する事なんで出来るわけないだろう？」

「本当にコネだけで入ってきたのかと思ったぞ」

「倍率１万倍超えてるんだぜ？この学校……まぁオフレコだが俺がＩＳ学園に入れた理由の大半がこの無茶が出来る体にあるって事さ。体育の授業の時も…」

「あぁ！それ聞きたかった！何で俺よりも早かったんだ？」

あの時、蒼真は時間内に到着したため、グランド２０週は無かったのである。

「此処から階段を下りて、更に反対側の玄関まで走る時間を短縮したのさ」

「どうやって？」

「そ窓こから飛び降りた」

「は…！？この部屋３階だぞ…？ＩＳも使わずに？」

「４階だと流石にまずいが、３階までなら飛び降りても割と平気なんだ。この窓から飛び降りれば後はグラウンドまで一直線だろう？」

それって卑怯じゃね？と思いながら窓から外を見る。結構な高さがある。飛び降りた事は無いが、鍛え方によっては飛び降りる事も可能なんだなぁと

一夏は感心した。

「勿論着地する時に衝撃を吸収はしてるぞ？そうじゃなきゃ、３階でもかなり危ない。今度やり方教えてやろうか？今の一夏なら３階なら大丈夫だと思うぞ？」

「衝撃の吸収の仕方？」

「あぁ、殴られた時に衝撃を吸収する方法があるだろう？アレをちょっと応用しただけなんだけどな、知ってるのと知らないのとじゃ大分差が出てくる。ＩＳの戦闘で役に立つかどうかは分からないけどな」

確かに、ＩＳ戦闘では通用するか分からないが、これを覚えれば少なくとも毎回グラウンド２０週は免れそうだ。

「分かった。教えてくれ」

「ＯＫ、マイフレンド」

こうして、一夏は蒼真からグラウンド２０週を免れる方法を会得する道を選んだのだった。

第４話：転入生の思惑と蒼真のやる気（後書き）

さてさて、如何だったでしょうか。
次回はクラス代表戦が始まります。そして、このクラス代表戦で蒼真のお守りの真実が……

第5話：セカンド幼馴染とルームメイト

「……おはよう」

「あぁ、一夏おはよう、そういえばもう学校に行く時間か、ちょっとシャワー浴びてくるよ、その後に一緒に朝飯行こうぜ」

本当に起きてる…、実の所一夏には蒼真の言っていた不眠不休のトレーニングが信じられなかったのである。実際のところ睡眠で回復するのは体力だけではない。
むしろ体力だけなら座って楽な姿勢をとっているだけで回復する。睡眠の中で一番重量なのは脳の回復である。

脳とは起きている間中働き続ける。そして休ませないと結果的に脳はオーバーヒートを起こす、そのオーバーヒートを起こさないために自然に眠気が襲ってくる。体力的には何も問題が無くてもだ、その生理現象とも取れるものを蒼真は無視している。それはハッキリ言って異常であった。

「眠くないのか？蒼真」

「無理やり起きてるって感じはあるけど、ある程度の眠気の波があってそれを乗り越えちゃえば平気。やばいなぁと思ったら休憩も含めて水風呂に全身浸かる大体これで不眠が出来る…って休憩してるんだから不休じゃないな…良く考えたら」

「それにしても無茶苦茶するなぁ……後でどうなっても知らないぞ？」

「後でどうなってもいいように鍛えておくのさ」

のれんに腕押しだな…こりゃ…やれるだけやらせておいて、限界が来たときに言ったほうが効果がありそうだ…と思って教室の前まで来ると見たことあるような誰かが立っていた。

「もうその情報は古いわよ。2組にも専用機持ちがクラス代表になったの、そう簡単には優勝できないから」

どうやらクラス対抗戦の話のようだ。2組に専用機持ちかぁ……確かに手ごわそうだ

「おはよう～」

みんなに挨拶しながら教室に入ろうとすると、転校生がそれをさえぎった。

「ちょうどいい所に来たわね、一夏」

そこには腕を組みながら、ドアにもたれてる転校生の姿があった。

そして一夏がその姿を見たとき……

「鈴……？お前、鈴か？」

「そうよ、中国代表候補生、凰・鈴音、今日は宣戦布告しにきたってわけ」

「なに格好つけてるんだ鈴、すげぇ似合わないぞ」

「んな……！？何てこと言うのよ、アンタは！」

さっきの余裕で気取っていた声は何処へ言ってのやら、その口調は一夏が知っている鈴の物に戻っていた。

「何？一夏、また知り合い？」

「あぁ、こいつは鈴、俺のセカンド幼馴染だ」

「……セカンド？」

なんでセカンドなんだ…？と蒼真は思っていると、

「おい」

その転校生で代表候補生でクラス代表で一夏のセカンド幼馴染に声を掛ける奴が居た。

「なによ！？」

その高圧的な態度に気分を一気に害した鈴は後ろを振りむいて……固まった。

バシンッ！

その直後に振り下ろされる出席簿、鬼教官の登場である。

「もうＳＨＲ（ショートホームルーム）の時間だ。教室にもどれ」

「ち…千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません……」

あれだけ強気だった鈴が完全にビビッている。蒼真には鈴が強いのか弱いのか良く分からなかったが、鬼教官（織斑先生）だけは別格なんだろうと自己解決に至った。

「またあとで来るからね！逃げないでよ、一夏！」

定番な捨て台詞を吐いて鈴は教室に戻っていった。

「……一夏、今のは誰だ？知り合いか？えらく親しそうだったな？」

「い、一夏さん！？あの子とはどういう関係で……」

そしてその声を起点として一斉に他の女子に取り囲まれた……が

「席に着け、馬鹿ども」

集まった生徒全員に漏れなく出席簿打撃が降り注いだ。

（さっきの女子は何なのだ……一夏とずいぶん親しそうに見えたが……それにさっきの対応…まるで……）

まるで幼馴染と再会したような反応だった……

（幼馴染は私だろう…！）

そして箒は全く授業を聞いていなかった。

「篠ノ之、答えは？」

「は…はい！？」

突然指名される。さらに箒は織斑先生（鬼教官）の授業中だという事をすっかり忘れていた……

「答えは？」

「……き、聞いていませんでした……」

バシーン！

おお…いい打撃音……それにしても頑丈な出席簿だな…ＩＳのシールドでも張ってあるんだろうか……

（なんなんですの、さっきの方は！）

同じく、セシリアも授業を全く聞いていなかった…

（とにかく…！差をつけるにはどうしたいいでしょうか…）

「オルコット」

「……たとえばデートに誘うとか。いえ、もっと効果的な……」

バシーン！！

一体今日は何万個の脳細胞があの出席簿によって死んでいったのであろう…

「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわ！」

昼休みの開口一番の箒とセシリアの文句であった。当然のことながら一夏には分かるわけがない。

「まぁ、話なら飯を食いながら聞くから。学食行こうぜ」

蒼真も一緒に４人で食堂に行ってチケットを買って並ぶ、そして、受け取って席に行こうとしたその時、

「待ってたわよ！一夏！」

噂の転校生がラーメンを持ちながら立ちふさがっていた。

「まぁ、とりあえずそこをどいてくれ、座れない、後ラーメン延びるぞ」

「わかってるわよ！大体、アンタを待ってたんでしょうが！なんで早くこないのよ！」

ずっと文句を言っている鈴をどうにか宥めて５人で食卓を囲む事になった。

「それにしても久しぶりだな。ちょうど丸１年振りになるのか。元気にしてたか？」

「元気にしてたわよ。アンタこそ、たまには怪我病気しなさいよ」

「どういう希望だよ、そりゃ……」

「所でさ、一夏、セカンド幼馴染って言ってたけど、どういう事？」
「ん？アンタだれよ？むしろＩＳ学園の男って一夏だけじゃなかったの？」
「あぁ、悪い、自己紹介が遅くなったな、俺の名前は鬼頭蒼真、ＩＳ搭乗資格研究機関から編入って形で入学した」
「あー…あの女だけがＩＳに乗れるのはおかしい！って言ってる所ね。何が目的なのよ？」
「出来る事ならＩＳに乗れるようになって帰って来いってさ、後はなぜ乗れないかの俺のなりの研究結果が欲しいんだと」
ちなみに、一夏と同じ部屋だ。という事を言った途端に鈴がピクンと反応した。
「蒼真…だっけ？ちょっと後で話があるから付き合いなさい」
「まぁ…いいけど…何？俺に気でもあるのか？」
「はぁ……？」
とても良い笑顔のまま背後には般若を宿して鈴は俺を睨みつけてきた。

「すみません、もう二度と言いません」

蒼真は怯えていた。

「分かればいいのよ、分かれば」

「一夏、そろそろどういう関係なのかを説明して欲しいのだが」

「そうですわ！一夏さん、まさかこちらの方と付き合ってらっしゃるの！？」

「べべ…別に私は付き合ってる訳じゃ……」

「そうだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼馴染だよ」

その言葉に落ち着いた2人だが、ふと疑問が沸いた。

「幼馴染…？」

「あー、えっとだな。箒が引っ越していったのが小4の終わりだろ？鈴が転校してきたのは小5の頭だよ、で中2の終わりには国に帰ったから、会うのは一年ちょっとぶりだな」

一夏は箒と鈴は面識が無い事にいまさら気が付いたようだ。

「で、こっちが箒。ほら、前に話したろ？小学校からの幼馴染で、俺の通ってた剣術場の娘」

「ふぅん、そうなんだ」

鈴はどうやらあまり良い気分ではないらしい。と言うか、２人とも睨みあってない……？

「初めまして。これからよろしくね」

「ああ、こちらこそ」

普通の挨拶に見えるがそこに火花が散っているのは気のせいではないだろう。

「ンンン！わたくしの存在を忘れてもらってはこまりますわ。中国代表候補生、凰鈴音さん？」

「……誰？」

「なっ！？わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットでしてよ！？まさかご存じないの？」

「うん。あたし他の国とか興味ないし」

「い、言っておきますけど、わたくしあなたのような方には負けませんわ！」

「そ、でも戦ったらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん」

「い、言ってくれますわね……」

わなわなと震えながら拳を握っているセシリアに対して、鈴は余裕その物である。よほど自信があるのだろう。

「一夏、アンタ、クラス代表なんだって？」

「お、おう。成り行きでな」

「ふーん……」

そういいながら豪快にラーメンのスープを飲む。そして飲みきった所で

「あ、あのさぁ。ＩＳの操縦見てあげてもいいけど？」

さっきの余裕な態度とは一変、相手の様子を伺うように歯切れの悪い彼女らしくない態度だった。だが、一夏にとってはとてもありが

たい申し出だった。
なんせ、箒の教え方は理解が出来ない。セシリアはクラスメイトではあるが、少し遠慮してしまいそうだが、その点鈴なら全く問題がない。

「そりゃ助か……」

ダン！

テーブルが叩かれた、それも全く同じタイミングで2回…あぁ…蒼真の食べていたロースカツが反動で宙を舞っている。可哀想に……

「一夏に教えるのは私の役目だ。頼まれたのは、私だ」

「あなたは2組でしょう！？敵の施しは受けませんわ！」

うお！？顔が怖いぞ2人とも。よっぽどクラス対抗戦に燃えてるんだな。俺も少しは見習おう。蒼真…もうそのロースカツは諦めろ……

「あたしは、一夏に言ってんの、関係ない人は引っ込んでてよ」

「か、関係ならあるぞ！私が一夏にどうしてもと頼まれたのだ！」

どうしてもって言った覚えないぞ。それに言ったのは確かセシリアとの決闘の時……おまけに剣道の事しかやってなかったような…

「1組の代表ですから、1組の人間が教えるのは当然ですわ。あなたこそ、後から出てきて何を図々しい事を……」

「後からじゃないけどね。あたしのほうが付き合いは長いんだし」

「そ、それを言うのなら私の方が早いぞ！それに、一夏は何度も家で食事をしている間柄だ。付き合いはそれなりに深い」

「うちで食事？それならあたしもそうだけど？」

鈴は自慢げに話し出した。そしてその言葉に驚愕する2人。

「一夏！どういうことだ！？聞いてないぞ私は！」

「わたくしもですわ！一夏さん、納得の行く説明を要求します」

「説明も何も…幼馴染で、よく鈴の実家の中華料理屋に行ってた関係だ」

「一夏……お前良い幼少時代を育ってきたな……正直羨ましいぞ……」

いや蒼真、別にそこまで特別にいい物じゃないだろう？別に普通だ

と思うが……そして余裕を持っていた鈴が途端にむすっとふてくされたと思ったら、対照的に箒とセシリアはほっとした様な顔をした。

「な、何？店なのか？」

「あら、そうでしたの。お店なら別に不自然な事は何一つありませんわね」

「あ、そうだ、親父さん元気にしてるか？まぁ、あの人こそ病気とは無縁だよな」

「あ……うん、元気……だと思う」

急に鈴の表情に陰りがさした。その顔に嫌な違和感が生じる。そして、それを吹き飛ばすように明るい顔で

「そ、それよりさ、今日の放課後って時間ある？あるよね。久しぶりだしどこか行こうよ。ほら、駅前のファミレスとかさ」

「あー、あそこは去年潰れたぞ」

実際駅前と言えど色々潰れている。リー○ンショック恐るべし……

「そ、そうなんだ、じゃ、学食でもいいから。積もる話もあるでしょ？」

んーとはいっても会ってないのは一年だし、そこまで積もる話も無いんだけどな……

「あいにくだが、一夏は私とＩＳの特訓をするのだ。放課後は埋まっている」

え…箒、まだ俺を剣道場でしごくのか…？流石に倍の時間は勘弁して欲しいんだが……

「そうですわ。クラス対抗戦に向けて、特訓が必要ですもの。特に私は専用機持ちですから？えぇ、一夏さんの特訓には欠かせない存在なのです」

そうか、セシリアが居るから、今日から本当にＩＳの特訓が出来るなぁ……少し楽しみになってきた。

「じゃあそれが終わったら行くから。空けといてね。じゃあね、一夏」

「え？鈴ちょっと待て……」

来るべき特訓の為に少し気合を入れていたら返事が遅れてしまった。そうして一方的に約束を交わして去って行ってしまった。そして俺は放課後は待たざるを得なくなってしまった。

～放課後第三アリーナ休憩室～

「無駄な動きが多すぎる。だから疲れるのだ。もっと自然体で制御できるようになれ」

特訓が終わり早速箒さんのお説教が始まっていた。そして、いつもは待ってくれている蒼真の姿がない、確か不眠不休トレーニングって言ってたな…あ、不休は外したんだっけ…だが、目の前にはちゃんと一夏を待っている人が居た。

「お疲れ。はい、タオル。飲み物はスポーツドリンクでいいよね？」

「サンキュ鈴。あー、生き返る……あ、それと話があるんだっけ？」

スポーツドリンクは冷えていない。だがそれで良いのだ。運動後の熱を持った体に冷たい液体を流し込むなど自殺行為に等しい。若いうちは大丈夫でも、大人になったときにその差が出るものなのだ。

「ごめん、あたしちょっとやる事出来たから、じゃあ、後でね、一夏」

そう言って、鈴は何処かに行ってしまった。「後でね」って…俺今から自室に戻るんだけど…あの安息の自室へ……

「ふぅ〜、疲れた〜……」

特訓後、自室までの帰り道に他の女子に囲まれて何とか自室（憩いの場）に戻ってきた一夏。

「おかえり、一夏」

「あぁ、ただいま、蒼真……？」

はて、蒼真はこんなにも高い声だっただろうか？おまけに、部屋の中にわずかに女の子特有の甘い香りもする……

「シ、シャワーは先に使わせてもらったから…別に良いでしょ、レディーファーストなんだから」

「あぁ、別にそれで構わな……って鈴！？なんでお前がここにいるんだ！？」

俺と蒼真の部屋にはなぜか、蒼真の姿は無く、その代わりに鈴が居た。

「何って、これから一緒に寝食共にするルームメイトだけど？」

「はぁぁぁ！？蒼真は！？蒼真はどうしたんだよ」

一夏の頭は混乱の極みだった。今までＩＳ学園では気さくに話あえる唯一の存在だった蒼真が…いつの間にか黒髪ツインテールに変わっていた…いや、そんな事はない…はずだ。

「蒼真には部屋を替わってもらったわ。勿論元私のルームメイトも承諾済みって事で何も問題はないけど？」

さっきの、蒼真に話があるってこの事か…！あぁ、もう！こいつは昔から何でも自分の思い通りになると思ってる節が在ると思ったら……まさかこんな事をするとは…

「大有りだ！！第一最初は男女が同じ部屋なのがいけないからって蒼真ルームメイトになったんだぞ！？千冬姉に見つかったりでもしたら……」

「大丈夫だって、就寝時間になって鍵さえ掛けておけば幾ら千冬さんだって……」

ダン！ダン！ダン！

「おい！開けろ！織斑！凰が居る事は判ってる！とっとと開けないとグラウンド５０週に反省文をレポート用紙２０枚で提出させるぞ！！」

鈴、速攻バレてるぞ…しかも結構本気で怒ってるぞ千冬姉……と鈴の方を向くと……鈴も顔面真っ青のまま震えていた。

「織斑先生、私が…」

「いえ、私のブルーティアーズなら鍵だけを上手く破壊できますわ！」

扉越しに箒とセシリアの声が聞こえる。蒼真の声は聞こえない、悪寒がして窓の外を見る。其処には腰に自動車のタイヤを５つ巻きつけた蒼真がグラウンドを走っていた……あの状態で…５０週…？死

んでしまう……

「こ…殺される……」

俺の声は間違いなく震えていただろう……

「ばっ！馬鹿っ！幾らなんでもそんな事はないでしょう…！」

小声で鈴が反論している、そして俺は窓の外グラウンドを走っている蒼真を指差す。

「窓の外…？え？蒼真…？」

そして鈴も一夏と同じものを見た後、俺のほうを見た。

「こ、こ……殺される……」

どうやら俺と鈴はここに来て、漸く事の重大さを知った。それを理解した後の俺達の行動は早かった。全速力でドアに向かいロックを解除、可能な限り早く扉を開けた。そして其処には……

「何を考えているんだ！！この大馬鹿共がぁ！！」

其処には織斑先生(鬼人)が立っていた。しかもその後ろには般若が2人、内一人はＩＳを展開している。そして、

ガン！！

一際大きい音を立てて織斑先生の鉄拳が俺の頭と鈴の頭に叩き落された。

「織斑！」

「はい！！！」

「グラウンドにお前の友人が居る。そいつには就寝時間までランニングを命じてある。だが、その友人の重りをお前達で共有する事を許そう。どうするかは自分で決めろ、仲良く分けろよ？就寝時間までお前も走って来い！」

「はい！！！！！」

余りの迫力に3階の窓から飛び降りた。そして蒼真に教えて貰った通りの衝撃吸収を成功させ、俺は一目散にグランドへ駆け出して行った。

「ほう…何時の間にあんな動きを覚えたんだ」

ほんの少しだが、千冬姉は自分の弟の成長を関心していた。

「……」

一夏が窓から飛び降りたのを見て一夏の心配をしている鈴だが、目の前の人物(鬼教官)はそれを許さなかった。

「さて…凰、蒼真とお前のルームメイトから聞いたところ、今回の首謀者はお前だと聞いたが…？自分のルームメイトを半ば強引に変えたそうだな？」

「ちゃ、ちゃんとお互いに許可を取りました……」

「あぁ、そうだな、一人ずつ確認を取ったな、そして、その2人の承諾を聞かないまま部屋を変えたな…？」

「あ…あぁ…あああぁぁぁ……」

鈴の顔が蒼白になる。恐怖の余り何も考えられない。全身を震わせている。

たしかに鈴は2人の許可を取った。だがその許可を取った2人同士

はルームメイトになる承諾をしていなかった。
鈴のルームメイトはまさか男がルームメイトになる等と露ほどにも思っていなかった。そしてその場に居合わせたのが箒とセシリアであった。

彼女達は蒼真達から事情を聞くと眼力だけで人を殺せるんじゃないかと思うほどの表情で職員室へ走っていった。そしてこの現状である。

「私をここまで怒らせた褒美として、明日から1週間、私が放課後に特別講習を行ってやろう。どうだ？嬉しいだろう？」

「は…はい！嬉しいです！！」

「そうか、そんなに喜んでもらえるとは私も張り切らなければいけないな…よし1週間と言わずに2週間にしてやろう、まずは…3人仲良く走って来い！！」

「ひぃぃぃぃぃ！！！！！」

～IS学園グラウンド～

「よぉ、一夏、お前もこってり絞られたみたいだな？」

「蒼真…そのタイヤ…４つくれ……」

「あぁ、このタイヤな…４つか…」

しかし、蒼真はタイヤを外そうとしない。

「蒼真？」

「あぁ、織斑先生に言われててな、一夏が来るまでは付けていろ、そして一夏がタイヤを幾つ自分につけて走るかの数を後で教えろってさ、数によって処罰変える予定だと思うぞ」

「え…？と言う事は…？」

一夏が来るまでと言う事はもうタイヤを外しても良いと言う事である。

「とはいっても、俺外す気無いんだよなぁ、これはこれで鍛えられる…むしろ好都合だ」

「おいおい…こういう処罰までトレーニングにするのか？蒼真…」

「ちなみに、何週走ったかはあそこに居る子が数えてるから、時間内に２０週回れなかった場合は追加のペナルティな」

……ひぃぃぃぃぃ！！！！

鈴の断末魔がグラウンドまで聞こえた。どうやら俺達以上に絞られているらしい……

「と言うか、なんでそんな事知ってるんだよ？蒼真」

「あの子がこっそり教えてくれたのさ。最初はビックリしてたんだが、割と気があってさ、其処で箒とセシリアとバッタリ…って感じさ」

ちなみに、あの子とは鈴のルームメイトである。そして蒼真の顔が赤い、それは走っているだけが原因ではなさそうだ。

「まぁ、とにかく走ろうぜ？体が資本だろう？俺達は？」

「はぁ…観念するか……」

そして、丁度その時に激昂状態の鈴がこちらに向かって走ってきた。

「一夏！全部！全部！なにもかもあんたのせいだからね！！」

半泣き状態で文句を言っている鈴。そこまで怖かったんだろうなぁ……

「なぁ…一夏…3人も居るんだから、そろそろ絞ったほうがいいんじゃない？」

「ん？絞るって何をさ？3人とも太ってないんだから、絞る必要も無いだろう？」

「なぁ…お前わざとやってない…？」

「一夏！アンタ、クラス対抗戦の時覚えてなさいよぉぉ！！！！」

蒼真の発言を全く理解出来ない一夏であった。そして、本当に3人は就寝時間までグラウンドを走り続けたのだった。

第5話：セカンド幼馴染とルームメイト（後書き）

はい、次回はついにクラス対抗戦になります。次回から主人公である蒼真の活躍するシーンが増える予定です。では、みなさん次回をお楽しみに

第６話：鈴ＶＳ一夏（前書き）

結構空いちゃいました。それに、今回は短いです。ごめんなさい（；・ω・）

第６話：鈴ＶＳ一夏

「いよいよ…だな…」

「なんてしんみり言ってるけど、結局戦うの俺なんだけど…」

シリアス顔をしながら一夏に話しかける蒼真。今日はクラス対抗戦の初戦だ。各クラスこの日の為にＩＳの特訓をしてきた。勿論鈴も一夏も……鈴とは前の一件以降全く接触が無かったが、その分やる気なのだろう。

「一夏、零落白夜は使い所を気をつけろよ？」

「あぁ、分かってる。なんたってセシリアのブルーティアーズのシールドエネルギーを一発で全部削るなんてとんでもない性能持ってるもんな」

零落白夜、一夏の白式の唯一の近接武器、シールド無効化攻撃と言う特殊能力を持った雪片弐型の最強攻撃である、シールドエネルギー無効化攻撃自体は零落白夜とは呼ばない、威力が最大の攻撃の場合のみを零落白夜と言う、使用条件は一夏と白式のシンクロ率ある一定以上になるでこと任意で使えるようになる。

使うと威力に応じてシールドエネルギーが削られていく諸刃の剣である。

ちなみにＩＳと特定の搭乗者のみが発動させられるアビリティを”単一仕様（ワン・オフアビリティー）”と言う、一夏の零落白夜はこの”単一仕様（ワン・オフアビリティー）”に分類される。

「でも、セシリアとの決闘の時はシールドエネルギー減らなかったんだっけ？」

「あぁ、なんでか知らないけどな、初回サービスだったりしてな？」

「お守りも関係してるんじゃない？あの時以降はちゃんと減ってるんだろ？」

「まぁな……けど考えてても仕方ないだろ、またお守り貸してくれるのなら、試して見るぜ？」

「だが断る」

即答だった。

「冗談だって、それに他人のお守りに頼ってるのもな…」

「自分で強くならないとな、お互いに…」

そんな雑談をしながら、丁度対戦の抽選が終わったモニターを一緒に眺てみた。

第1回戦：織斑　一夏　ＶＳ　凰　鈴音

「わーお……マジかよ」

「お前ら2人運命の糸で結ばれてるんじゃね？」

一夏がやめてくれよ……という顔をしていた所で、後ろから対戦相手が声を掛けてきた。

「あら一夏、1回戦目とはねぇ……ふ…ふふふ……あの時の屈辱を何倍にもして返してあげるわ……」

鈴さん…目が…目が怖いです…。
織斑先生との特別授業はどうやら一夏達の想像を遥かに超えたものらしい……自業自得なのに……

「鈴…織斑先生に何されたんだ……？」

蒼真…お前と言う奴は何でこうも地雷を踏むのが好きなんだ？幾ら頑丈なお前でも今回は命の保障しないぞ？

「へぇ蒼真…良い事を聞いてくれるわね…あぁ！もう全部あんた達

が悪いのよぉ！！！」

何かを言いかけたところでいきなりキレ出す。もう手が付けれられない。

「第1回戦の選手は待機室に移動してください」

「っ！とにかく！アリーナで覚えてなさいよ！！」

鈴と分かれて蒼真と一夏も待機室へ移動した。

「行ってくる」

「頑張ってくださいね。織斑くん」

「殺されるなよ～」

「早く行け、馬鹿者」

なんだよぉ…2人とももうちょっと応援してくれたっていいじゃないか…山田先生みたいに……と少し思ったが、目の前の敵に意識を集中させる。

〜アリーナ〜

「一夏今ここで土下座をするのなら少しは痛めつけるレベルを下げてあげるわよ？」

「雀の涙ほどだろう？だったらいらねぇよ、全力で来い！」

「一応言っておくけど、絶対防御も完璧じゃないのよ？シールドエネルギーを突破するだけの攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」

つまり、鈴は自分なら『死なない程度にいたぶる事』位なら簡単に出来るけど、それでもいい？と言ってきているのだった。

――――――両者試合を始めてください。

一夏の変わりに試合の開始のアナウンスが返事をした。次の瞬間２人は激突した。

最初はお互いに近接武器での応酬だ。鈴は青竜刀、一夏は雪片弐型、両者火花を散らせている。接近戦だけでは一夏も鈴とそこまで差があるようには見えなかった。だが……

ヒュッ！

白式が何かを感じ取り、一夏は直感的にその場から離れた。そしてその直後…

ドォン！

その何かが、地面に激突した。見えない何かが……

「へぇ、良く避けたわね、この「龍砲」は見えない事がメリットの武器なのに」

「衝撃砲か…！」

「中々察しが良いじゃない、この「龍砲」は空間に圧力を掛けて相手に撃ち出す。砲身斜角はざっと３６０度って所だけどね？」

おいおい…３６０度って…ＩＳに乗った時点で視界そのものが３６０度になる。その状態で３６０度全方位攻撃が使えるとなると、接近する事自体が難しくなる。

近接武器しか持たない一夏に取ってはかなり厳しい状態であった。

「ぐっ！」

衝撃砲が肩に当たる。装甲によって守られていたが中々痛い、だがこれくらいなら強引に突っ込める…！

「ちなみに、今のはジャブだからね？」

気が付いたときにはストレート(本来の威力)が撃たれていた。かわすことが出来ずに直撃し、地面に叩きつけられる。

「ぐあ…！」

シールドで相殺できなかった分の衝撃が一夏の体に直接叩き込まれる。意識が飛ぶような事は無いが、思ったよりダメージは大きかったようだ、直ぐには動けない。

「じゃあ…ゆっくりと痛めつけてあげる」

鈴が追撃を放つ、それを間一髪で避け鈴と向き合う。一夏の目が変わる、それは幼馴染と話している時の目ではなく、敵と認識をした眼で鋭く相手を睨む。

「鈴」

「なによ？」

「本気で行くからな」

「な、なによ……そんなこと、当たり前じゃない……とっ、とにかく格の違いってのを見せてあげるわよ！」

強気な言葉で返すものの、動揺は隠せていなかった。正直なところ、鈴は一夏の真剣になった眼に気おされると言うよりも、意外な表情に見とれて狼狽したのであった。

そして、一夏と鈴がお互いの武器で切りかかろうとした時……それは起きた。

第６話：鈴ＶＳ一夏（後書き）

更新が遅れてすみません。風邪を引いたのと、仕事が忙しかったです。
このままでは、折角のオリジナル主人公の蒼真が可哀想なので、頑張って更新していこうと思います。

第7話：男なら…

――――ギュン！…ズドォォン！！

一夏と鈴の間にビームが打たれた。いち早く気が付いた鈴が一夏を蹴り飛ばし、鈴は3次元躍動旋回（クロス・グリッド・ターン）で回避する。
一夏も乱入者に気が付き空を見上げる。それは、漆黒の全身装甲（フルスキン）のISだった。それはアリーナのバリアを先ほどのビームで貫通させ侵入して来た、
アリーナのバリアはISのシールドと同じ物で出来ている。そのバリアを貫通させる事が出来ると言う事は、ISを装備していても、ダメージが本体に貫通すると言う事だ。

「なんだ！？あのISは」

『一夏！試合は中止よ！直ぐにピットに戻って！それまではあたしが何とかするから、あたしの甲龍（シェンロン）は持久戦が得意だから心配しないで！』

鈴がプライベートチャンネルで話しかけてくるが、一夏はそんな事は全く考えていなかった。

「何を言ってるんだ！鈴！逃げるのはお前だ！俺がコイツを何とかしておくから！」

等と言い合いをしていると……

――――――所属不明のＩＳと断定、ロックされています。

「俺にロックされてる！？」

それと同時に漆黒のＩＳは胸部と両腕の砲門から一斉にビームを放ってきた。

キュン！…キュキュン！

何発か避けきれずに掠る、ダメージは余りないが連続では食らえない、こちらは試合をしていた分エネルギー残量が相手より少ない。そう考えていた時、目の前にビームが迫った所に鈴が割って入り青竜刀でビームを弾いた。

「一夏、衝撃砲援護するから突っ込みなさいよ。武器、どうせそれしかないんでしょ」

「その通りだ。じゃあ、それでいくか」

一夏と鈴はすぐさま逃げると言う選択ではなく2人で落とすと意思疎通をする、流石は幼馴染と言った様子だ。どの道このままでは客席に被害が及ぶ可能性があり、それまでは誰かがあのＩＳを抑えておかなければいけない。

「織斑先生！これは……！しかも2人ともやる気ですよ！？あぁ！どうしたら…！」

想定外の非常事態に混乱状態になっている山田先生。

「本人達がやるといっているんだ、やらせてみてもいいだろう」

「お、織斑先生！何をのんきな事を言ってるんですか！？」

「落ち着け、コーヒーでも飲め。イライラするのは糖分が足りないからだ。」

そう言って、テーブルにあったコーヒーに砂糖（塩）を入れる織斑先生。

「織斑先生、それ塩っすよ…？やっぱり一夏の事が心配なんですね、そんなミスする程……」

そう、確かにそれは塩だった。だがタイミングが悪かった。

「鬼頭、お前はコーヒーに塩を入れるタイプだったな、さぁ飲め微塩だ、嬉しいだろう？」

「あの…織斑先生？姉として弟の一夏が心配なのは、十分に伝わったので、勘弁して下さい……」

「山田先生と私だけがコーヒーを飲んでいてはここに居るお前だけが不公平じゃないか、遠慮せずに飲め」

蒼真は自分が火に油を注いでいる事に気が付いていない。

「あ…あの織斑先生……？」

「あぁ塩が足りなかったか、もっと入れてやろう、気が利かなくて悪かったな」

「いえ！僕微塩がいいです！これ以上だと僕の好みから外れてしまうので直ぐに戴きます！！」

コーヒーカップを素早く取り、その場で一気に飲む、火傷はしなかったが、口の中は苦くてしょっぱい涙の味がした……

「先生！わたくしにＩＳ使用許可を！直ぐに出撃できますわ！」

「そうしたい所だが、これを見ろ」

言われてセシリアが織斑先生から受け取った情報端末機を見る。

「遮断シールドがレベル４に設定……？しかも、全ての扉がロックされている！？あのＩＳの仕業ですの！？」

「そのようだ、これでは非難する事も救援に向かう事も出来ないな、幸い向こうのピットは避難を終えている残っているのは私達だけだ」

「で、ですが！緊急事態として政府に助成を……」

「今やっている、現在も三年の精鋭がシステムクラックを実行中だ。遮断シールドを解除したら、直ぐに部隊を突入させる」

「では！私もその時に部隊の参加を！」

「無理だな、お前のＩＳは１対多向きだ。多対１ではむしろ邪魔になる」

「そんなことはありませんわ！このわたくしが邪魔などと……」

「では、連携訓練はしたか？その時のお前の役割は？ビットをどういう風に使う？味方の構成は？敵はどのレベルを想定してある？連続稼動時間は？」

「わ…わかりました！もう結構です！」

「ふん、わかればいい、とにかく今は待て」

待っている事しか出来ないセシリアは、悔しそうにアリーナを見ていた。

「一夏！馬鹿っ！ちゃんと狙いなさいよ！」

「狙ってるっつーの！」

「一夏っ！離脱！」

衝撃砲で援護をしながら一夏が突っ込む、この連携を何度も繰り返し、一夏が敵に向かって剣を振り下ろした回数は４回、だがそのどれもがかわされていた。

相手のスラスターの出力が尋常ではなく、零距離から攻撃をしても避けられてしまう。そして、攻撃を避けると今度は反撃をしてくる。ずっとこのパターンだ。

「なぁ…あいつの動きって何かに似てないか？」

「はぁ？何かって何よ？」

「なんというか…機械じみてないか？」

「はぁ？ＩＳは機械よ？何言ってんの？」

「そうじゃない、あれって…本当に人が乗ってるのか？」

言われて、鈴も気が付く、今までの行動がまるで殆ど同じという事に、だが訓練されればわざとそういう動きをする事だって不可能ではない。

「は？ＩＳは人が乗らないと動かな……」

そこで鈴がもう一つ気が付く

「アレ、さっきからあたしたちが会話してるときって余り攻撃してこないわね…まるで興味があるように聞いてるような…」

だが、鈴はその考えを改める。

「ううん、でも無人機なんてあり得ない、ＩＳが人が乗らないと絶対に動かない。そういうものだもの」

確かにそれは、ＩＳの教科書にも載っているほど基本的なことだ。だがＩＳの研究は日々精進している。ならば無人機の試験機体と言う可能性は無いだろうか？

「仮に、仮にだ、無人機だとしたら？」

「何？無人機なら勝てるって言うの？」

「あぁ。人が乗っていないのなら容赦なく全力で攻撃しても大丈夫だからな」

「あんた…何言ってるの？」

「零落白夜を使う。俺の持っている雪片弐型の最大威力攻撃だ。雪片弐型の攻撃力は零落白夜を含めて高すぎる。訓練や学内対戦で全力を使うわけにはいかないが、相手が無人機なら最悪の想定をしなくてもいい」

「高すぎるって…具体的にどれ位なのよ？」

「セシリアのブルーティアーズを一撃でシールドエネルギーを０にした」

「はぁ！？どんな馬鹿げた攻撃力なのよ！？」

「あぁ分かってる。だから、高すぎる（最悪の想定が起こる）って言ってるんだ」

「まったく、ふざけてるわね、その剣……」

「あぁ、だから拡張領域（パス・スロット）がひとつもない」

「まぁいいわ、けどどうやって当てるのよ？あんたの攻撃一回も当たってないじゃない」

「次は当てる」

確信に満ちた眼、一夏がこの眼をする時は、決まって何か策がある時だ。鈴は他の方法を模索したが思い浮かばず、お互いの残り少ないシールドエネルギーでは後一回が限界だと、自分でも分かっていたので、一夏にかけることにした。

「言い切ったわね。じゃあ、絶対にあり得ないだろうけど、あれが無人機だと仮定して攻めましょうか」

鈴の顔も引き締まる。

「一夏」

「ん？」

「どうしたらいい？」

「俺が合図をしたら、アイツに向かって全力で衝撃砲を撃ってくれ」

「当たんないわよ？」

「良いんだよ、当たらなくても」

それが、攻撃を当てる為のエネルギー(動力源)なんだから……

「じゃあ、早速……」

そして、一夏が突撃体制に入ろうとしたその時。

「一夏ぁ！！！」

キィーン…と鳴り響く声は箒の物だった。放送室を見るとマイクを握った箒がこっちを指差して見ていた。

「男なら……男なら、その位の敵に勝てなくてなんとする！！」

箒から見れば、それは一夏に喝を入れる為のものだったが、他人(漆黒のIS)から見ればそれは、興味を持ち標的にする格好の的だった。

そして、敵は一夏と鈴から目を離し箒に向き直る。一夏はこのままでは間に合わない！と感じた。

「鈴！やれ！」

「やれって…目の前にあんたが居たら撃てないでしょうが！」

「いいから撃て！間に合わなくなる！！」

間に合わなくなると言う言葉で鈴も気が付く、このままでは箒が危ないと

「ああ…もう！どうなっても知らないわよ！！」

そう言って、最大出力の衝撃砲を一夏に向かって撃った。

背中のスラスターが衝撃砲のエネルギーを吸収していく。

”瞬時加速（イグニッション・ブースト）”

一夏が特訓を経て覚えたクラス対抗戦の切り札。使い所を間違えなければ代表候補生とも渡り合える技だ。

原理は、背中のスラスターからエネルギーを放出する。そして、そのエネルギーを内部に一度取り込み圧縮して放出する。その際に得られる慣性エネルギーを利用して、爆発的に加速する。

それはつまり、外部からのエネルギーでも良いと言う事だ。そして、『瞬時加速』の速度は使用するエネルギー量によって比例する。

そして、背中からの衝撃で体がみしみしと体がきしむ音を聞きなが

ら俺は加速した。

「おおおぉぉぉ！！」

雪片弐型が強く光を放つ。中心の溝から外側に展開したそれは、普段より一回り大きいエネルギー状の刃を展開していた。これが一夏の”単一仕様（ワンオフ・アビリティー）”零落白夜である。

ありとあらゆるエネルギーを無効化し、ＩＳのシールドエネルギーを一撃で０にする事さえ可能な雪片弐型の最強攻撃。

衝撃砲を使っての加速は漆黒のＩＳにも予想外の速度だったのだろう。箒に気を取られ見逃したその一瞬を一夏は見逃さなかった。

ザン！

零落白夜は敵のシールドを無効化し、敵の右腕を切り落とした。だがその反撃で左側の拳をモロに食らい吹き飛ばされ、雪片弐型が手から離れる。

「一夏！」

鈴が叫ぶが敵は残った左腕の砲口を一夏に向けている。そして、そ

のビームが放たれる刹那……

「狙いは？」

「完璧ですわ！」

ブルーティアーズ４機による一斉狙撃が漆黒のＩＳに叩き込まれた。
そう、遮断シールドはさっきの一撃で破壊した。
手放した雪片弐型

零落白夜の目的は敵を攻撃する事ではない、敵がこちらに意識を集中している間に、遮断シールドを破壊するためだったのだ。

遮断シールドは復元を始めている。突入部隊が入れるほどの時間は稼げなかったがプライベート・チャンネルで打ち合わせをしておいたセシリアは入る事が出来たのだった。

「決めろ！セシリア！」

一夏の言葉に答えるようにスターライトＭｋ３で漆黒のＩＳを打ち抜く、そして漆黒のＩＳはその場で停止をした。

「ギリギリのタイミングでしたわ」

「セシリアならやれると信じてたさ」

「そ、そうですの……と、当然ですわね！何せわたくしはセシリア・オルコット、イギリスの代表候補生なのですから！」

「ふう……なんにしてもこれで終わ……」

――――――――敵ＩＳの再起動を確認！警告！ロックされています！

「！？」

警告に気付くのに遅れた再起動した敵に一夏は殴り飛ばされた。

「「な！？」」

殴り飛ばされた一夏のシールドエネルギーが０になる、ＩＳの強制解除はされなかったが、シールドはもう無い、これ以上攻撃を食らえば、それは全て生身の体で受ける事になる。

「一夏！」

その事に気が付いた鈴が一夏を敵の間に割って入り、セシリアも近付けさせまいとビットとライフルを使い援護射撃を行う。

「一夏！今のうちに早く逃げなさいよ！後はセシリアとどうにかす

るから！」

「いや…だが…！」

逃げようとしても、予想以上の弾幕に避ける事で精一杯だった。

「セシリア！アイツの砲口狙って！何も撃てなくなれば、あたしが格闘戦に持ち込むから！」

「簡単に言ってくれますわね……！」

先ほどからセシリアはその砲口を狙っているのだが、思った様に当たらない。その間にも避ける事の出来なかったビームで徐々にシールドを削られていく。

「全くなんだってんのよ！コイツはぁ！！」

勢いに任せて、衝撃砲を撃ちながら無理やり近接攻撃を仕掛ける。

ギィン！！

肩の装甲を持っていかれたが、その代わり、胸部の大部分の砲口を潰す事ができた。

「つぅ…！」

だがその突撃で限界だったらしく、鈴のシールドエネルギーも０になりＩＳが解除されてしまった。

「鈴！」

「一夏！」

その場から動けない鈴を一夏が白式でアリーナの隅まで移動させる。

「鈴ここで待ってろ」

「待ってろ…ってあんた、まだ戦う気！？」

「セシリア１人だけ戦わせておけるか！」

「あぁ、その通りだ一夏、だからお前の変わりに俺が行ってくる」

２人は声の主の方を振り向く。

「あの鉄くずを黙らせてこれば良いんだろう？…まぁ任せとけ」

そして、そのまま漆黒のＩＳに向かう。生身の人間が……

「待てって！蒼真！！お前相手が何なのか分かってるのか？むしろ何で居る」

「見た感じＩＳの無人機って所じゃない？動きがパターン化してる。が破損箇所は結構あるし、何とかなるっしょ、どうやって入ったって？セシリアと同じだけど？」

「なんとかなるって……どうやって生身のあんたがＩＳに敵うのよ！」

「何言ってるんだ？鈴お前だって今生身だろう……」

「あたしは！今まで戦ってたの！一緒にしないでよね！！」

「まぁ、無駄話はこれ位にしよう…とにかく行ってくる」

そして、敵に向かっていく蒼真を一夏が止める。

「蒼真、俺は行かせないぞ」

止める一夏に対し、蒼真は真っ直ぐと一夏の眼を見た。

「一夏、俺は死にに行くんじゃない、時間稼ぎに行くんだ。俺とセシリアが時間を稼いでいる間に、エネルギーを回復させておいてくれ、俺も長くは無理だ」

一夏はどうしても納得が行かなかったが、今まで2人で押さえ込んでいた敵を1人で抑えられる訳が無い、最悪の結果だってありえる。

それにセシリアが倒れれば、今ここに居る全員が最悪の結果になる、そうなったらもう誰も助からない。

自分の守りたいものが自分も含めて全て消えていってしまう。一夏は蒼真も同じ考えだったんだろうと思った。

それを覚悟の上で向かうと言ったのなら、止められない、男は一度決めた事は曲げない。なら蒼真の時間稼ぎも俺[男]が曲げる事は出来ない。

「……俺が回復したら直ぐ逃げろよ？」

「当たり前だ……じゃあ、行ってくる、流石にセシリアだけじゃ無理がある」

そう言って、蒼真は絶対に勝てない敵《世界最強の兵器》に向かって駆け出していった。

第7話：男なら…（後書き）

引っ張りに引っ張りまくってすみません。
ですが、ようやく蒼真の戦闘シーンです。残念な結果だったらごめんなさい（´・ω・）

第8話：鬼頭蒼真VSゴーレム

「くぅ…しつこいですわね！いい加減にしなさい！！」

鈴が抜けた事により、セシリアは状況はかなり厳しいものとなっていた。それはこちらのビットのエネルギー残量が無くなりかけているのである。

通常ＩＳのコアから提供されるエネルギーは機動＋攻撃用とシールド用と分かれている。ＩＳによって対比はさまざまだが、セシリアの場合8割ほどが機動と攻撃に割かれている。

ビットを起動するエネルギーは機動用、ビットからビームを撃つエネルギーは攻撃用、機動用のエネルギーは余り心配する必要は無いが、攻撃用のエネルギーはビットだけではなくエネルギー兵器を使うたびに減っていく。

最低限の機動用エネルギーは移動時の風力による発電で補助をしているので基本的に切れる事はない。

ブルーティアーズから攻撃用のエネルギーが3割を切った事知らされた。早くどうにかしなくては避ける事しかできなくなってしまう。時間が経てばエネルギーは回復していくが今は戦闘中だ。とても回復している余裕は無い。

どうやったら今の状況を好転出来るかを考えて居たその時、ビットの射撃をすり抜け、セシリアの前に漆黒のＩＳが現れる。

「しまっ…！」

一夏に負けた時の事を思い出す。悔しいと思いながらも避ける事が出来ない攻撃に歯を食いしばった。

――――ヒュン！

突然漆黒のＩＳがセシリアから離れた。そしてそのまま避けることを強要した相手と向き合う。

「おい、俺のダチに何やってるんだよ」

そこには雪片弐型を構えた蒼真が立って居た。

「なっ…！蒼真さん！？なぜこんな所に…！早く逃げてください！ここは危険ですのよ！？」

「あぁセシリア、お前がな……」

そう言って蒼真は一直線に敵に向かって突っ込む。漆黒のＩＳは左腕の砲口を向けると同時に蒼真が雪片弐型で斬りかかる。

――――ヒュン！

空振り、蒼真の攻撃は当たり前のように敵にかわされた。そうビームを撃たずに……

「やっぱりな……！これなら行ける…！」

そして蒼真は立て続けに攻撃を仕掛ける。飛ばれては厄介なので飛び掛りながら攻撃を仕掛ける。

そして漆黒のＩＳは反撃はせず、そのまま後退し避け続けるだけ……セシリアは疑問に思った。なぜあのＩＳは蒼真に反撃をしないのだろうと

それには理由があった。あの漆黒のＩＳは無人機で自動操縦（オートパイロット）で動いている。

それはＩＳを前提に設定された物であり、人間が攻撃してきたときの事を想定されていないからだ。

しかし、破壊されるわけにはいかないので避ける事しか出来ない。もしあのＩＳが反撃をしてくる時は蒼真を敵と認識した時だろう。

ＩＳでは無く、まだ敵として認識できていない蒼真に攻撃という選択が出来ない状態だった。

つまり、蒼真は漆黒のＩＳが敵と思わない限り、目的である時間稼ぎが出来る筈だった

――――ヒュウゥゥン……

「え……！？」

突然雪片から出ていたエネルギー状の刃が消え蒼真の手から消えた。それは雪片弐型に残っていたエネルギーが尽きて、待機状態に戻ったのである。

それは蒼真にとって大きな誤算だった。一夏が言っていた「お守り」を持っている時は零落白夜のエネルギーが減らなかったと言う事を「お守り」が雪片弐型にエネルギー供給を行っている物だと信じて疑っていなかったからだ。

雪片弐型ならビームを撃たれても剣で弾く事が出来るので自衛も可能だ。

だから遮断シールドを壊したまま放置されていた雪片弐型をもって漆黒のＩＳに突っ込んだのである。だが、その思い込みは間違っていた。そして最悪が重なる。

ギュン！

「！！」

何かが飛んでくると直感で悟り、蒼真はその場から離れた。その後

に後方から聞こえる破壊音、それは漆黒のＩＳによる物だった。

蒼真は漆黒のＩＳから敵（攻撃目標）と認識され、ロックされた。丸腰の状態で世界最強の兵器に狙われた。最悪（最高の状況）の状況である。

ある意味では蒼真はこの状況を待っていた。普通にＩＳ学園で生活しているだけでは決して起こらないこの状況を……

「はぁ…でも、何でだろうな…お守りからエネルギー供給されてるんじゃなかったのか？それとも、もうお守り分も尽きたとか？まぁでも、不謹慎ではあるが、一度やってみたかったよ（戦ってみたかった）…お前（ＩＳ）と」

蒼真の雰囲気が変わる。それは教室で見せていたようなひょうきんな物ではない、敵に対し明らかな闘志を滚らせていた。

「聞いてるのか知らないが…まぁ聞いとけ、俺はな、今のまで人間同士と喧嘩して負けた事が無い。理由は鍛えすぎてるからだ。今ならＫ－１の世界王者だって簡単になれる位な。お守りを持って無茶が出来るようになってから、両親が家に居ない事を良い事に、鍛えられるだけ鍛えた。その辺で喧嘩を吹っ掛けられても負け無し、自動車にはねられた事もあった。流石に痛かったが病院に行くほどでもなかった、普通の人間なら死んでしまうのに…だから思っちゃうのさ……俺の体は何処が限界何だろうって……それを知るのに一番手っ取り早い方法がお前だ。」

その話を聞いている人間は6人、一夏、セシリア、箒、鈴、山田先生、織斑先生だ。一夏以外は「お守り」の事を知らないので一夏以外は蒼真の言葉を理解できなかった。

「そりゃあ、先生にＩＳと戦わせてください！なんて言えないだろう？普通に考えて気が狂ってるとしか思えない、だから非常に不本意ではあるが、お前の登場に俺は少なからず感謝している。本当なら一夏の白式と戦って見たかったんだけどな……」

漆黒のＩＳは動かない。何か興味があるのか突っ立っているだけだ。

「じゃあ行くぜ？世界最強の兵器（インフィニット・ストラトス）さん？」

次の瞬間蒼真は突っ込んだ。その速度はＩＳには届かないが人間では出せない速度だった。

狙いは一点、ハイパーセンサーのある頭部、此処さえ壊してしまえば、人間で言えば五感を失うようなもの、つまり攻撃対象が居なくなるという事。

それは目的を失い停止（勝利）する事と同意である。

ガン！

顔面に吸い込まれていく蒼真の拳、だがそれはシールドによって阻まれた。そして、機械じみた動きで素早い反撃が来る。

「っち……！やっぱり簡単にはやらせてくれないか！！」

身を翻して、反撃を避ける。ＩＳでさえ避ける事が難しい攻撃を蒼真はまるで知っているように避けた。

「今度は……！」

左右から同時攻撃、シールドで遮られる、そのシールドを支えに膝を使い、頭部に一撃を叩き込む。

「ダメか……！ってうわっ！！」

胸部の砲口が光り、ビームが発射されるが、膝蹴りの反動を使い、それを回避する。

「やべぇ……打つ手無いわ……此処まで破壊されてれば、どこかに隙でも出来るんじゃないかと思ってたんだけどなっ……とぉ！！」

今度は敵のほうから接近をして来た。向こうもビーム系のエネルギ

ーは残り少ないらしい。蒼真はそれを先読みをして避けている。

「お前の動きは、全部分かってる。ドイツ式の遠距離射撃型のＩＳの基本戦闘動作だ、遠距離射撃からカウンターに至るまでな、逆にそれ以外の行動を取らないのなら、お前の動きの先読みくらいは出来る。これが人間相手なら話にならないが、プログラムで設定された動きなら次どういう行動をすればいいか分かるさ」

簡単に言っているものの、一発でも当たれば間違いなく致命傷、下手をすれば即死、その緊張感が蒼真の体力を想像以上に減らしていった。

「はぁ…はぁ……一夏はまだかよ……！」

時間にして２０分程度だが、蒼真にとっては2時間以上戦っているように思えた。一夏の方を見ると白式を展開したまま、ずっとこちらを見ている。

戦えるほどのエネルギーはまだ回復していないらしい。

（……なさい）

「！？」

自分の中から声が聞こえた。そして、それが命取りになった。

ズン！

腹に左腕が叩き込まれた。腹に叩き込まれたのだが、相手に左腕が大きすぎるので、蒼真には壁が自分からぶつかって来たと思った程だ。

「ぐは……」

吹っ飛ばされる。生身の肉体で鉄の拳を叩き込まれたのだ。通常とはかけ離れた鍛え方をしていても、それは致命傷だった。蒼真は倒れたまま動かない。

「テメェェ！！」

逆上した一夏が回復したエネルギーを全て注ぎ込んだ雪片弐型を展開し、漆黒のＩＳに突撃していくが、ビームでスラスターを破壊され、ＩＳを強制解除された。

（逃げなさいと言っているのがなぜ分からないのですか）

それは、凛とした女性の声だった、上から目線のような口調だが上から目線とは思えない。君主に仕える忠実な騎士のような声だった。知らない声の筈なのに、聞いたことの無い声の筈なのに、その声とは昔から一緒に居たような気がした。

（あなたでは、アレには勝てない、そんな事最初から分かっていた事でしょう）

「分かってるよ…最初から……けど、憧れるじゃないか……男なら一度は……」

（一度は？）

「世界最強（ナンバー・ワン）に……」

（では世界最強になる為に私を使って体を鍛えていたのですか？）

「今はそれだけじゃない、守りたいものも出来た、初めて出来た友達（夏達）を守りたい」

（あなたはＩＳ学園に入るまでまともに友人を作らなかったですからね）

「しょうがないだろう？あの頃は必死だったんだ、理想（世界最強）に向って…俺ならなれると思ってた。いつかＩＳにも乗りこなして世界最強って……」

（その結果がこれですか）

「上手い事時間稼ぎできると思ったんだけどな」

（わたしはあの武器にエネルギーを提供したのではありません。あの白式（主人）にエネルギーを提供したのです）

「成程……だから俺が雪片弐型を持っても直ぐにエネルギー切れになったのか…」

蒼真はそれを聞いて納得する。

（これからどうするつもりですか）

声は問う、俺に今からどうするかを……勿論答えは決まってる。

「当然、立って時間稼ぎをするさ」

（無理ですね、今のあなたは私に生かされている、今私が提供して

いるエネルギーを断てばあなたは助からない）

「なんだ、やっぱり俺は普通の人間なのか……」

（ええ、私に守られていると言う特別が少々付きますが、普通の人間です）

「守られている？」

（あの時言われたではないですか、白式（主人）の前の搭乗者に、あなたを守れと）

そして理解する。あぁ、こいつなんだ、あの時俺を助けてくれたのは、俺が無茶出来るのは、約束（俺を守る事）を守り続けてくれているのは……

「お前は、剣だな」

（いかにも、私は剣です）

「お前は俺を守るといったな？」

（はい私はあなたを守ります。そう言われていますから）

「分かった、じゃあお前を使わせろ」

（何を言っているのですか、あなたは今も私を使っているではありませんか）

「それはあくまで防具（回復）としてだろう？俺は攻撃に使わせろと言って

るんだ」

（あなたはまだ戦うつもりですか）

「当然だ、それに分かってるぞ、もう動ける程度には回復してるって」

痛みはまだある。だが殴られた直後の激痛は無い、同じ所を攻撃されなければ問題なく動けるだろう。

（私を使うには登録が必要です。そしてあなたはまだ登録をしていません）

「登録？」

（ＩＳの武装で言う使用者の登録です。それを行わない限りわたしは守ることしか出来ない）

蒼真には自然と理解できた。こいつも戦いたがっていると、本当は盾として守るのではなく剣として守りたいのだと。

「今すぐ登録しろ」

（今登録を行うと、約束（あなたを守る）は破棄されますがよろしいですか？）

「問題ない、約束は破棄していい。だが使用者として命令する。今

まで通り盾としても俺を守れ」

（……登録を完了しました。現在の登録を抹消。新しく鬼頭蒼真を使用者（マスター）として登録しました）

言い終わると同時に頭の中で「お守（剣）り」の基本情報を理解した。

（あなたを１０年間ずっとみてきた。怒り、悲しみ、苦しみ、喜び、わたしもその全てを共感してきました。その中であなたは道を間違えなかった。マスターあなたと出会えた事に感謝します。今から私は貴方の盾となり剣となりましょう）

……目を開ける

どうやら気を失っていたらしい、だが必要な事は全て覚えている。

目の前にはＩＳを強制解除された一夏が漆黒（敵）のＩＳと対峙している。

あぁ…楽勝だ…こんな奴、コレ（剣）があれば一刀両断できる……絶対の自信を持ち立ち上がる。

「スー…ハー…」

息を整える。体中が痛む、無理もない、あんな馬鹿げた拳を叩き込まれたんだ普通の人間である俺が耐えられるわけがない、そう俺だ……

けだったら……

「行くぜ…相棒」

（行きますよ、ソウマ）

1人（蒼真）と1本（剣）は、1人（蒼真）の仲間を救う為に世界最強（インフィニット・ストラトス）の兵器へ突っ込んだ。

第8話：鬼頭蒼真VSゴーレム（後書き）

疲れました（；・ω・）仕事がキッツイです！でも何とかひと段落するまでは書こうと思ってます！

第９話：空を裂く光の剣

１０年前を思い出す、焼けたコンクリート、紅い景色、その中で黄金に輝く白い剣を……そして、いつの間にか手にはＩＳの近接ブレードが握られていた。

「うおおおおぉぉ！！」

敵に向かって剣を振り下ろす。

「！！？」

その場に居た全員が驚愕する。ＩＳの拳を全身に食らい倒れたいた蒼真が立ち上がり、ＩＳの近接ブレードを持って敵に切りかかったのである。

突然の出来事だったが、視界が３６０度開けているＩＳに取っては奇襲そのものが基本的には通じない、漆黒のＩＳは左腕から迎撃としてビームを放ってきた。

――――――キィン！

近接ブレードでビームを弾く、今までの戦闘データを見る限り蒼真

はビーム兵器を避ける事しかしていなかった為、漆黒のＩＳの予想ロジックから外れる。

人間ならば一瞬で思考転換が可能だが、無人機にはそんな芸当は出来ない。一からデータを取り直し、最インプットをして理想的な戦闘を行うようにロジックを作り変える。だが、その時間を与えないように攻撃した場合どうなるだろうか？

――――ギィン！ギン！ガシィン！！

相手にロジック構築の時間を与えないほどの連続攻撃、結果的に漆黒のＩＳは避けるか防御をするしか出来ない。

計算速度や正確性は人間とは比べ物にならない無人機は戦闘構築の最適化や距離にる武装対応、力加減等、戦闘に必要な様々の物を最も効率よく行える理想的な兵器であるが、決められた動きしか出来ないという弱点がある。

ならば、決められた動きが決定する前に攻撃を仕掛ければ、防衛機能による防御行動以外出来ない。そして、一定の力で相手に切りつけるのではなく、不規則な力で強弱をつけながら切りつける。そうする事により一撃毎に相手に再計算を強要させる。

（わかっていますね？ソウマ）

「勿論だ、コイツを倒す方法だろう？」

（私を真名により開放しなければ、今のあなたでは勝つ事が出来ません、いずれこの攻防は終わりを迎えます）

「だから作るんだろう？その状況を」

（分かっていればいいのです、では御武運を…）

剣の開放、それはつまり、白騎士事件で白騎士がミサイルを切った際に使った攻撃である。あの攻撃を当てる事さえできれば、あんなＩＳ（鉄屑）等敵ではない。

だが、それには幾つかの条件が必要だ。蒼真の連続攻撃は全てその攻撃を行うための準備である。

この武器は特別製だ。普通のＩＳの武装とは違う。恐らく製作者は試験的に造ったのであろう。自分の限界に挑戦がしたかったのか、白騎士を最強にしたかったのか、それともただの気まぐれで作ったのか、何にせよ相手がＩＳである以上この武器で勝てない敵は存在しないだろう。

―――キュン！

防御に回っていた漆黒のＩＳが反撃を行ってきた。それは蒼真からすれば最高の判断と最悪の判断どちらにも傾く。そしてそれは最悪の方に傾いた。

漆黒のＩＳはロジック構成を破棄、今までの戦闘結果で得た結果と

現状判断で戦闘を行う。蒼真の予測できない動きを行う可能性が極めて高い戦闘方法だ。

「やっべぇ……」

これ以降の戦闘は先読みの回避が不可能になる。後一撃でも食らえば間違いなく戦闘不能どころか即死すらありえる状況になった。迂闊に飛び込むことができない。

――――――キュン！キュキュン！

胸部からビームを一斉に発射してくる。蒼真は自分に当たるビームのみを弾くが数が多すぎる。そして一発のビームを弾き損ねたその時……

――――――チュイン！！

蒼真の目の前で他の方向から撃たれたビームが弾き損ねたビームを弾いた。突然の事に驚きビームの方に視線を向ける。

「何を余所見をしていらっしゃるの！わたくしがサポート致しますから突っ込みなさい！」

そこには残り少ない攻撃エネルギーを使ってブルーティアーズを展開するセシリアが居た。その言葉に後押しされ蒼真は突っ込む。

「いくぜぇぇぇ！！！」

弾くビームを最小限に抑え手に力を込める、エネルギーが集中し白い刀身が黄金色の光を纏う。その光が線に見える速度で蒼真は突っ込んだ。

――――――――ギン！！

確かな手応え、思わずニヤリを笑みを浮かべる顔、蒼真の剣は肘辺りから漆黒のＩＳの腕を切り落としていた。

「よっしぁ！！」

漆黒のＩＳが距離を離す。蒼真はこの時、剣を開放しなくても勝てると思った。

両腕がなくなった今、相手の攻撃は胸部の砲口３門によるビーム砲撃のみ、両足が残っているが、それも今のように切ってしまえばこちらの勝利は揺るがない。だが、相手がなぜ距離を取ったのかを蒼真は次の瞬間に理解する。

――――パリン！

漆黒のＩＳの胸部が音を立てて開かれる。そしてその中にある物を曝け出した。

「まさか……そんな！」

漆黒のＩＳが胸部に隠していた物とは、大型荷電粒子砲（砲口）だった。

改めて見るとその漆黒のＩＳはその荷電粒子砲の砲台とも捉えられるような造りに見えた。大きい体は物理攻撃を強化する為ではない、その荷電粒子砲の反動を耐えるための設計だとしたら……？

考えている内に漆黒のＩＳは空高く飛翔する。セシリアがブルーティアーズを使って打ち落とそうするが、出力が足りず、シールドを突破できない。

アリーナに存在する人間は４人、一夏、鈴、セシリア、蒼真だ、だがピットと放送室を含めれば織斑先生、山田先生、箒が居る。セシリアが相手の荷電粒子砲の火力測定を始める。

「いけません！蒼真さん！一夏さん！逃げてください！この場所から出来るだけ遠くに！！」

火力測定の結果はセシリアが考えていたレベルよりも高かった。
直撃を受ければ、ブルーティアーズの防御力では一撃でシールドを破壊され絶対防御が発動し、ＩＳは強制解除されるだけの火力を有していた。

幸か不幸かまさにこの状況は、蒼真が望んだ状況であった。

「セシリア！一夏達を一箇所に集めて守ってくれ！早く！！」

「何を言ってますの！？ＩＳを所持していないあなたが一番危険なのですよ！？」

「俺なら大丈夫だ！早く行け！時間も余りない！俺を信じろ！」

普通なら全く信じられる状況ではなかったが、現段階において蒼真は生身では絶対に敵わないとされて来たＩＳの腕を何処からか持ち出した近接ブレードで切っている実績がある。

それにセシリア自身では現状打破出来ない。だが蒼真にはそれがあるという。ひょっとしたら自己犠牲の可能性だってある、蒼真が荷電粒子砲の標的（ターゲット）になれば、少なくともアリーナに居る残り全員は助かるだろう。

セシリアは短い時間の中でどちらを取るかの判断を迫られた。その時に思い出す。蒼真は信じろと言った。ならば蒼真の友人である自

分は何を信じるべきか……答えは決まっていた。

「蒼真さん？これが終わったら後で一緒にディナーでも如何かしら？」

「あぁ……最高に美味いイギリス料理を期待してるぜ？」

「えぇ…任せてくださいな、このセシリア・オルコットの手料理なんてそうそう味わえる機会なんてなくってよ？」

お互いに笑っていた。それはお互いを信頼しているからこその笑いだった。そうでなければこんな状況でこの後一緒に飯を食べようなんて約束なんて出来やしない。そしてセシリアは一夏達を守りに行った。

「ったく……本当に開放しないといけなくなるとはな……まさか知ってたんじゃないだろうな？」

（さぁ？何のことだか分かりませんが、わたしは言いましたよ？私の真名でないと倒すことはできないと）

「なんだかんだ言って、お前も目立ちたがり屋なんだな」

（ですから！何のことを言っているのか分からないと言っているではありませんか！）

相棒が少し拗ねている。どうやらこいつは必ずこうなる事を知って

いたようだ。なぜか分からないが……

「行くぞ」

その一言で剣(相棒)は理解する。そして、己の全てを解放する……

――――――ヒィィィィン……

蒼真の周りから眩い黄金の光が溢れ出す。その光は蒼真の持つ剣の刀身から放たれていた。それに対し漆黒のＩＳは空中で荷電粒子砲のエネルギーを溜めていた。どちらも引かない真っ向勝負、これが蒼真の望んでいた最高の状況。

頭の中に送り込まれたデータを参照する限り、この攻撃は地上に向けて打ってはならない、建物がある方角へ撃ってはならない、と言う大雑把な物だったが、それだけの威力があるという事で今は納得する。

更に、これは相棒のエネルギーを一回で全て使い切る攻撃だ。故に必中でなければならない。

故に相手が空中に居る状態で必ず攻撃を当てられる状況、それが蒼真と剣が勝つ為の条件、そして今まさにその状況、相手は自分が勝つ事を確信して自分の最強の攻撃を打つ為にエネルギーを溜めている。

つまり、その攻撃を放つまでは絶対に動かない……！！

「なんだよ……あれ……」

アリーナの端に移動しセシリアに守られている一夏達はその光景を信じ難い目で見ていた。

「一夏さん？あなたはあの剣に見覚えがあるような事を言っていましたがあれはなんなのですか？」

「俺の推測に過ぎないけど、あれは多分、蒼真の「お守り」の正体だ」

「お守り？」

「あぁ簡単に説明すればあれは白騎士の剣だ」

「はぃ！？白騎士ってあの１０年前の白騎士事件の白騎士ですの！？」

「なんでよ！おかしいじゃない！白騎士は国に提供分解されて第一世代ＩＳに大きく貢献したはずでしょ！？なんでその剣が此処にあんのよ！」

「悪いがそれ以上は俺の口からは言えない。直接蒼真に聞いてくれ」

だが、そう言っている間にも双方のエネルギーは更に高くなっていく。

「おいお前(鉄屑)、感謝するぜ。お前が居なかったら相棒(この剣)と一緒に戦うことはなかっただろう」

「……」

漆黒のＩＳは何も答えない、答えないのか答えられないのかも分からないが、相手も全力で攻撃してくることは間違いないだろう。

そして蒼真より一足早く荷電粒子砲の出力が臨界点に達し放たれる。

――――――ドォォォォン！！！

必殺の威力を込めて空から地上に向けて巨大な荷電粒子砲が放たれる。そして次の瞬間、地上は黄金色(こがねいろ)の光に包まれた。

（いきますよ！ソウマ！）

相棒の声が聞こえる。こっちの準備はとっくに出来ている。後は真剣の名前(名前)をもって開放するだけ……

今までずっとコイツに守ってもらってきた。そしてこれからもずっ

と守ってもらうのだろう。だったら、相棒なんて呼ばずにちゃんと名前でも呼んでやるべきだ。

――――これからも宜しくな相棒！！

刀身が二つに割れるそこにはＩＳの近接ブレードではなく人間が扱えるサイズの大剣があった、そして剣（相棒）を振るう。

収束する光。その純度は巨大なだけ漆黒のＩＳの大型荷電粒子砲とは比べるまでもない。

「――――”約束された勝利の剣（エクスカリバー）”ーーーー！！！！」

蒼真は真名を持って聖剣（相棒）を開放した。

――――ズギィィィン！！

放たれた物、それは光の線だった。触れるものを例外なく切断する光の刃。その刃は荷電粒子砲を容易く切り裂き、漆黒のＩＳをシー

ルドごと両断し、アリーナのバリアをつき抜け、雲を裂きながら消えていった。

約束された勝利の剣（エクスカリバー）、イングランドにかつて存在したとされ、騎士の代名詞と知れ渡る騎士王の剣、それが白騎士の剣となって現代に甦りそして今、蒼真の手に渡った。

「……」

アリーナとピットに居た全員言葉が出ない、目の前の状況が信じられない。生身の人間が途轍もない光の剣で世界最強（インフィニット・ストラトス）の兵器を両断した。その事実が受け入れないでいた。

「嘘だろ……幾らなんでも……」

蒼真自身、まさかここまでとんでもない代物だとは思っていなかったらしく、無傷でいる自分と両断され殆どが溶解した漆黒のＩＳだった物を見ていた。

どれ位の時間だ経ったのだろうか、実際には数秒の沈黙のはずだが、詳しいことは誰も覚えていなかった。

「全員こちらのピットに戻って来い」

織斑先生の一言で全員がはっとし、大急ぎでピットに戻っていった。
その後漆黒のＩＳだった物は教師陣により処理された。

～一夏と蒼真の部屋～

「蒼真、今回の事はどういうことだ。説明しろ」

「国際条約でＩＳ学園でのＩＳ関係の技術の提供は任意と言う事になっていますが？」

「分かった、技術面は聞かん、経緯を説明しろ」

蒼真を始め漆黒のＩＳと対峙していた全員が一夏と蒼真の部屋に来ていた。

「説明はします、ですがなんでこんな状況になったのかの説明をまずしてください」

「事が重大すぎる、お前の持つその剣は危険すぎると言っているんだ。今回は運が良かったが、次が同じになるとは限らん」

事実、今回は非常に運が良かった。ＩＳ学園の外部からはあの光の刃は多数の目撃情報があり、現在でもニュースの話題になっている。

今回の事を学園側は国家レベルによる軍事秘匿事項として、処理をしてくれた為、色々な情報の憶測のみが回っていた。

学園内でも緘口令がしかれ、漆黒のＩＳとの戦闘に直接関係した一夏達は誓約書まで書いた。

「分かった。俺の知っている全ての情報を言おう。ただしこれから聞くことは全て秘匿してもらうのが条件だ」

「勿論だ。お前達もそれでいいな？」

織斑先生の確認に全員が首を縦に振る、その秘匿とは学園内でも秘匿するという意味であり、ＩＳ学園で教師２人生徒４人以外誰にも話さないという物である。

学園側としても話されては非常に困る。生身の人間、それも男がＩＳを凌駕する攻撃をする事が出来ます等と言う事になれば、下手をすれば一夏の時以上の混乱を招くことになる。

それは他人でも使える可能性が残っているからだ。蒼真本人しか使えない場合でも問題は多数ある。

蒼真自身が他国に誘拐され、悪用されるようなことが起きた場合、ＩＳでも対処しきれないかもしれない。

「分かりました」

「分かりましたわ」

「わかったわ……それにあたし達は結果的に蒼真に助けられた。それが知られたくない事ならあたし達は黙ってるわ。当然の事よ」

その言葉に全員が頷く。恩は恩で返す物だ…と、そして蒼真は語りだす。エクスカリバー（相棒）との出会いから今までの話を……

「成程な、つまりそれは白騎士から貰った剣であり、それがあのＩＳとの戦闘中に突然使えるようになった…それ以外は一切分からないと」

「ある程度の事なら、聞けば教えてくれると思います」

「……聞くだと？」

エクスカリバーと意思疎通が出来ると言うと、織斑先生は蒼真を鋭く睨む。

「織斑先生…？顔が怖いんですが……」

「私は考え事をするとこういう顔になる。慣れろ、では試しに展開させて見ろ。今は待機状態なんだろう？」

言われて意識を集中させる、あの時の事を思い出し、相棒（エクスカリバー）を呼ぶ。

――――キン！

すぐさまエクスカリバーは蒼真の手に現れた。だがそれはＩＳ用近接ブレードとは違った物であった。

「小さい……？」

一夏が自分の雪片弐型のサイズを思い出して感想を述べる。

「あぁ、どうやらエクスカリバーが俺用に調整してくれたみたいなんだ、あのままだと大きすぎるだろう？」

確かに、ＩＳの近接ブレードそのものでは人間にとっては大きすぎる。それをエクスカリバーが自らの意思で調整した……その事に一つの確信を持って千冬は言う。

「山田先生、例の物を」

「はっ！はい！織斑先生…どうぞ」

そして織斑先生はとある機械を取り出した。

「千冬姉、それ何？」

「これはＩＳのコアナンバーを調べる物だ、全てのＩＳにはコアナンバーがあるだろう？だからコイツは何番なのかを調べれば素性が明らかになると思ってな、蒼真が構わなければ調べたいのだが」

千冬はエクスカリバーがどんな物であるかをこの中で一番知っていた。それゆえに蒼真の言っていることが事実かどうかを確かめる必要があった。これが本当にエクスカリバーだとしたら、千冬はコアナンバーを知っている。

「この場で調べるのであれば問題ないです。預けるのであれば拒否します」

「この場で調べる。貸してくれ」

――――――――コアナンバー０００と確認されました。

「コアナンバー０００？」

「これってどういうことなんだ？白騎士が世界で最初のＩＳでコアナンバーが００１って言うのは知ってるけど、０００って……むしろ武器にＩＳのコアが搭載されてるって……どういう事！？むしろ千冬姉！なんでコアが内装されてるって分かったんだ！？」

「大声を出すな馬鹿者、何のために此処にいると思ってる。ＩＳのコアの特徴だ。使用者に応じて武装の形を変える、お前も経験しただろう」

「ファースト・シフトって事か？つまり……これってＩＳなのか……？」

「ＩＳではない、ＩＳとは宇宙空間の活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツだ。この剣（エクスカリバー）は武器である以上ＩＳには該当しない」

「なんか本当にとんでもない話になってまいりましたわね…ＩＳのコアを搭載した武器だなんて……」

「簡単に言えば超強い剣って所でしょ？」

鈴……お前の単純なその頭が欲しい……

「一夏？今失礼なこと考えたでしょ？」

「いや？そんなこと無いぞ……？」

なぜ、ばれたし

「現状をまとめるぞ、蒼真、まずお前にはその剣（エクスカリバー）の使用を禁止する」

「嫌です」

「何……？今がどういう状況か分からないとでも言うのか？」

「状況は分かってます。でも使用を禁止した所で、今回のような事があったら俺は躊躇い無く使います、なので使用の禁止は意味がない」

「分かった、なら使い所を間違えるな、良く考えて使え」

「分かりました、織斑先生」

「残りの者は、誰にも言うな」

「「「「はい」」」」

そして、俺と蒼真以外のメンバーは解散した。

「コアナンバー０００か……本物だな、それにしても複雑な気分だ……」

「織斑先生？何か言いましたか？」

「いや、なんでもない、それより本当にあの戦闘映像を見たのは私達だけか？」

「はい、学園全体の本日の映像記録関係が全て消えていましたので、あそこに居た私達以外、学園長ですら知らないかと」

「分かった、まったく問題児だらけだな…うちのクラスは……」

「ははは……」

頭を悩ませる千冬と苦笑いする山田先生は職員室へ向かって歩いていった。

「疲れたぁ～」

「あぁ、全くだ、鈴との試合だけじゃなくてあの黒いＩＳまで出てきたもんなぁ……」

「そうそう、さっき聞いたけど、今日の事件の調査とかで政府関係者が来るから明日は学園休みだって、制服着用なら外出もＯＫだってさ」

「蒼真……その地獄耳が俺も少し欲しい……」

「地獄耳とは失礼だなぁ」

「じゃあ、明日どっか行こうぜ？駅前とかさ」

「そうだな……特に用事もないしいいぜ」

「まずはゲーセン巡りに、カラオケとかもいいな」

「お！カラオケか！そりゃいいな、カラオケなら大勢の方がいいからみんな誘って見るか？」

「いいねぇ……こういうときは多いほうが楽しいと相場が決まってる、よし一夏携帯貸してくれ」

「いいけど…なんでなんで俺の携帯なんだ？」

いいからいいから……と言って蒼真は各自にメールを送る。その内容は

箒

「箒、頼みがある、明日一日俺と付き合ってくれ、返事待ってる」

鈴

「明日、俺と一緒に遊びに行かないか？鈴と一緒に遊びにたいんだ」

セシリア

「なぁ、セシリア、明日お前と一緒に是非とも行きたい所があるんだが、付き合ってくれるか？」

送信っと

「うあああああ！！！待て待て蒼真！！！」

気付いた時には既に全件送信済みだった。そして5分もしない内に返信が来た。

箒
「しょうがない奴だな…たまたま明日は一日空いている。お前がどうしてもと言うなら付き合ってやろう、幼馴染だしな…」

鈴
「まぁ、今日の気分転換にはなると思うし……行ってあげるわよ幼馴染だし、感謝しなさいよ」

セシリア
「まぁ…明日は偶然一日何も予定がない日なので、付き合って差し上げない事もないですわよ？」

他者多様だが、全員ＯＫと言う返事だった。一夏が自分のベッドで死んでいたがそれを一切気にせず蒼真は各自に返信を打つ。

「じゃあ、明日１０時に正門で、よろしくな（ハートの絵文字）」

送信っと……

「悪魔だ……悪魔が居る……」

「やだなぁ一夏、みんなと一緒に遊ぶんだよ？楽しいに決まってるじゃないか」

ちなみに悪魔と言うのは一般的には極悪非道、悪者と言うイメージがあるが、最初は神の敵と言う意味合いを持っていたんだって

「って蒼真？なんで最後にハートマークつけたんだ？」

「…なんとなく？」

一夏は明日に備えて寝る事にした。漆黒のＩＳ以上に手強い相手が３人も居るのだ、体は資本…体は資本……そう思いながら、今日と言う日は終わった。

第9話：空を裂く光の剣（後書き）

やーっとひと段落着きました。次回はみんなで駅前に繰り出してワイワイやろうというのをコンセプトに書こうと思います。

第１０話：プリクラとメインイベント会場

「あら箒さん、鈴さん、おはようございます」

「「おはよう」」

３人の女性がＩＳ学園の正門に立っていた。そして３人ともとても普段着とは思えない服装である。外出する際に届出を出しておけば、制服を着用する必要は無いのでこの３人はメールの返信をした後直ぐに職員室に駆け込んで行ったのであった。そう差をつける為に……

「それにしても皆さん気合が入ってますわね、今から誰かとおでかけですか？」

「まーねー（一夏と一緒にデートなのよ～羨ましいでしょ～）」

「たまには出かけようと思ってな（それにしても一夏の奴め…２人きりで出かけるというのに……まだ来ないのか…）」

「あら偶然ですわね、私もですのよ？（身だしなみ、化粧、香水全て完璧ですわ！そ、それに何があってもいい良いように下着も……）」

３人とも余裕の笑みである、３人とも一緒に遊ぶなんて事を全く想定に入れてない、自分が一夏と２人っきりでデートするのだと全員

が信じていた。

「よぉ、と言うか早いな……」

9時30分、予定より30分早くそこに現れたのは、昨日遊びのメールを出させられた一夏であった。後ろには蒼真も居る。

（な、なぜ蒼真がいるのだ……今日はふたりっきりのはずだろう…！！）

（蒼真…？まぁ別の用事でしょ、一夏も来たし、さぁ今日は何処につれてってもらおうかしら…コースはちゃんと準備してあるんでしょうね）

（レディを待たせないと言う一夏さんの気持ちは分かりましたわ、次はエスコートですわよ？）

三者三様、そしてその誰一人として蒼真を勘定に入れていない、だが蒼真はそんな事は最初から分かっている。むしろ、そうでなくてはやっていけない…精神的に……

なので蒼真は一夏はそういう星（モテモテ）の元に生まれているんだろうと言う解釈をしている。

「全員揃った所で、先ずは駅前に行くか、商店街を見て回ろうぜ」

「「「全員？」」」

場の空気が凍る、３人はその時に理解した、ここに集まった全員一緒に遊ぶのだと……

「一夏！わたしはお前がどうしてもと言うから…付き合ってやるんだぞ！？」

「あたしと遊びたいっていったのはあんたでしょうが！」

「是非とも一緒に行きたい所があるとおっしゃっていたじゃありませんか！！」

爆発、３人の声はＩＳ学園中に聞こえるのではないかと言うくらい凄まじかった。

「まーまー３人ともちょっと……」

蒼真が仲裁に入る……が

「はぁ？」

「なんですの？」

「なんだ？」

そこには鬼が3人居た。いや、お前らマジ怖ええよ……俺も専用機2体とか無理だぜ？あれは機械で動きが読めたからこそあそこまでやれただけであってだな…エクスカリバー（相棒）もまだエネルギーが完全に回復してないからあの攻撃は打てない……ってそういう事じゃなくて……

「俺が見ている中で今日一番一夏と仲良く出来た奴に、明日の朝6時まで一夏と一緒に部屋に居させてやろう」

ボソッと囁く、蒼真の提案とは、今日一番仲良くなれた人と今晩ふたりっきりにさせてやろう、と言うものだった。

「「「！！！」」」

そして、3人の表情と雰囲気が一気に変わる。

「たまにはみんなと一緒に買い物と言うのも良さそうだな、うん」

「そうね！みんなでワイワイやったほうが楽しいわよね！」

「他国の年頃の女性の趣味がどの様な物か興味がありますし、おも

しろそうですわね」

他人から見ればそれは年頃の女子が仲良く話しているように見えるのだが、なぜか一夏には背中から3人の背中から燃え上がる炎が見えるのだった。

「よっしゃあ、まずはゲーセン行こうぜ、ゲーセン」

「そうだな、じゃあ駅前行こうか、みんなもいいか？」

蒼真の提案する所＝仲良くするステージだと理解している3人は文句の一つも言わずにＯＫを出した。

「じゃあ、これやってみようか」

ゲーセンに着いていきなり蒼真が指定した物は……プリクラだった。

「「「？？？」」」

3人は全く分からないといった感じだったので一夏が説明した。

「プリクラって言うのは、友達や恋人同士が一緒の写真を取る機械の事さ、写真に絵とか文字とかも入れたりしたような…」

説明を聞いたとき3人は蒼真にアイコンタクトをした。「良くやった！」と……

「んーでも、みんなの気が乗らないのなら別のにしても……」

「な、何事もやって見ない事には楽しさが分からないだろう！」

「そ、そーよ！何事にもチャレンジしなきゃね！！」

「郷に入れば郷に従えということわざもありますわ！！」

こうなってはもう止まらない、先ずは箒からである。

「い…以外に狭いな…」

「まぁ…こんなもんだろ」

プリクラの筐体は色々あるが、恋人と密着出来るようにとわざと筐体を小さくしているメーカーもある。

「ほら、箒が好きなフレーム選べよ」

「そ、そうか…分かった…」

（これだ…さっきから見ていてコレが一番いい…！）

「お、箒らしい絵柄だな俺もこういう絵柄好きだぞ」

「そ…そうか！なら早速撮るとしよう！」

箒が選んだ柄は日本の風景の竹藪をメインにしたフレームだった。一夏はそれを実に箒らしいと思ったのだ。そして箒がすっと腕を組んできた。いきなりの事に一夏が驚くと

「しょうがないだろう、狭いんだから……」

「まぁ……仕方ないか…」

2人とも顔を赤くしながら笑顔でプリクラを取り出てきた。

「次はわたくしの番ですわね！」

その言葉ど同時に一夏の腕を取りプリクラの筐体に入っていくセシリア、他の人から見れば誘拐ではないのか？と思える程の速度だった。

「意外と…狭いですわね」

「意外とな……ほら、セシリアが絵柄選べよ」

「はい、どれが良いかしら……」

色々なフレームから自分に相応しいフレームを…！と思い探していると、中世の町の一角のようなフレームがあった。セシリアにはそれが祖国イギリスの町との共通点を感じそのフレームにする事にした。

「こちらの絵柄でお願いしますわ…では…」

そう言って腕を組む、一夏はまた？と思ったが、

「この機械が狭いのでしょうがないではありませんか……」

「まぁ…そうだな……」

そして、顔を一夏に預けるような感じでプリクラを撮った。

「次はあたしの番ね」

幼馴染の余裕を見せると何回も自分に言い聞かせて、出来るだけ自然に見せかけて一夏と一緒にプリクラへ入った。

「ほら、鈴がフレーム決めろよ」

「当たり前じゃない、んーこれがいいわね」

即答、だがそれには理由があった、狭い筐体の中で幼馴染の余裕が完全に無くなっていたのである。そしてたまたま自分好みのフレームを見つけ、すぐさまそれを選択した。

「ほら、撮るわよ」

「お、おう」

そして鈴も前の2人に違わず腕を組む……が一夏の反応が薄い、鈴としては女の子が自分から腕を組み胸を押し付けるような体勢になっているというのにリアクションが薄いのが納得できない。

ひょっとして、幼馴染の余裕は一夏の方にあるのではないだろうかと考えた程である。

「あんた…なんか言う事ないの？」

「え？」

「え？じゃないでしょ…あたしと腕を組んでおいてその薄いリアクションはなによ！」

「え…あー…その……」

実の所同じ様なシチュエーションも3回目にもなると耐性がつく、それに前の2人と鈴では非常に残念ながらボリュームが違う。その差が一夏に薄いリアクションとして現れたのだ。

「な…なんか言いなさいよ…」

顔が赤くなりもじもじしながら鈴が聞く。その仕草は一般的な男性が見たらツンデレ属性に間違いなく目覚める破壊力を秘めていた……が、一夏はそのレベルでは倒せないのだ。

「胸成長してないな、お前」

――――――プツン

鈴の頭で何かが切れた。そしてそれを感じ取った蒼真だったが、遅かった。後悔した内容は、鈴と最初に撮らせるべきだった……と言うことだ。

「あ、あんた……！言ってはならない事を言ったわねぇ！！！」

一夏も自分の犯した過ちに気が付くがもう遅い、

――――――カシャ

「へ…？」

シャッターの音で我に返る鈴、プリクラの画面には鬼の形相の鈴と真っ青な顔をした一夏が写ったプリクラが既に現像中であった。はぁぁぁぁ……と鬼の形相で口から息を吐く鈴、一夏には殺気が口からこぼれたとしか思えない。

「待て！鈴！こういう筐体は一台２００万以上するんだぞ！？」（本当にそれ位します）

「！？」

ＩＳを腕部のみ展開して一夏に殴り掛かろうとした鈴がピタリと止まる。

「あ…あんた……！覚えてなさいよ！！！」

怒り心頭状態で鈴はプリクラから出てきた。

「さて、全員終わったな、鈴だけ凄まじい出来になってるが……」

「何を言っていますの？まだ全員ではありませんことよ？」

蒼真は不思議に思った。此処にいるのは4人でその内女性が3人それぞれが一夏とプリクラを撮ったのなら全員ではないか。

「そうだな」

「そういえばそうね」

箒と鈴も同意している。あれ？一夏ラバーズって現状3人だろう？他に誰か居たっけなぁ……

「なにしてんのよ、あんたも撮るのよ蒼真」

「そうだ、早くしないと次の予定もあるのだろう？」

「そうですわ、昼食が遅れてしまいますわ」

「え…え…？」

ズリズリとプリクラに連れて行かれる蒼真。一夏もきょとんとして見ている。

「あんただけ仲間はずれって訳には行かないでしょ？」

「サービスですわ」

「お前には世話になっているからな、特別だ」

そして、蒼真は人生初女性3人と一緒にプリクラを撮ったのであった。当然中は狭いのでとんでもない密集率だが、誰一人そのそれに対して文句は言わなかった。

「感想は？」

「ＩＳ学園に入れてマジ良かったと思う……」

蒼真の感想に満足した3人だったが、同時に一夏にもこれ位の感想が言えるようになって欲しいと思うのであった。

その後、レースゲーやガンゲー等をみんなで楽しんでゲーセンを後にしたのだった。

「さて…次が本日のメインイベントだ」

「蒼真、昼飯がメインイベントなのか？」

「昼飯はメインイベント会場で食べるのさ」

そう言って蒼真は携帯を取り出し、電話を掛けた。

「もしもし、今から２０分位でそちらに着く予定ですが、５名フリータイムで部屋空いてます？……はい分かりました、お願いします」

メインイベント、フリータイム、全員が入る空き部屋……その言葉から連想される状況を十代の乙女達は想像した。

（な…な…何と言う事をする気だ！蒼真…！昼間から……それも全員でだと！？）

（蒼真！…あ、あ、あんた、全員って幾らなんでも…それにあんたも加わるって！？昼食ってまさか……）

（昼間からずっと…そこで昼食……昼食！？どうやっても昼食を食べる……食べる！！？まさか…そんな！？あ…でも今日は何があっ

ても良い様に下着も……）

妄想全開で全員が茹蛸になっている状態で何も考えてないまま店（会場）に入った。

「すみません、先ほど電話をした鬼頭ですが」

「はい、当店のご利用は初めでですか？」

「いえ、初めてじゃ無いので大丈夫です」

「初めてじゃないってぇ！？」

素っ頓狂な声を上げたのは鈴だった。そして、箒とセシリアも蒼真に驚愕の眼差しを向けている。

「まぁ…何かあればよくこの系列の店は来たし……安いから」

「じょ……常連ですって…！？」

「では、お部屋は３階の３０２号室になります。ではゆっくりとお楽しみください」

「おお、おた、お楽しみだと！？」

「おた…おた…おたたたた……」

「……（突然すぎて何も考えられない）」

「何やってるんだ？早く行くぞ」

「時間がもったいないだろ」

一夏と蒼真が先導する。
決して逃げられない状況の中、挙動不審の3人と男2人はメインイベント会場へ入っていった。

第１０話：プリクラとメインイベント会場（後書き）

大変長らくお待たせしました。仕事多忙＋新人の歓迎会等中々小説を書く時間が取れません。スローペースではありますが、頑張って書いていこうと思っているので、長い目で見てやってください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1301x/

IS〜インフィニットストラトス〜　Sword & Sword

2011年11月6日13時17分発行